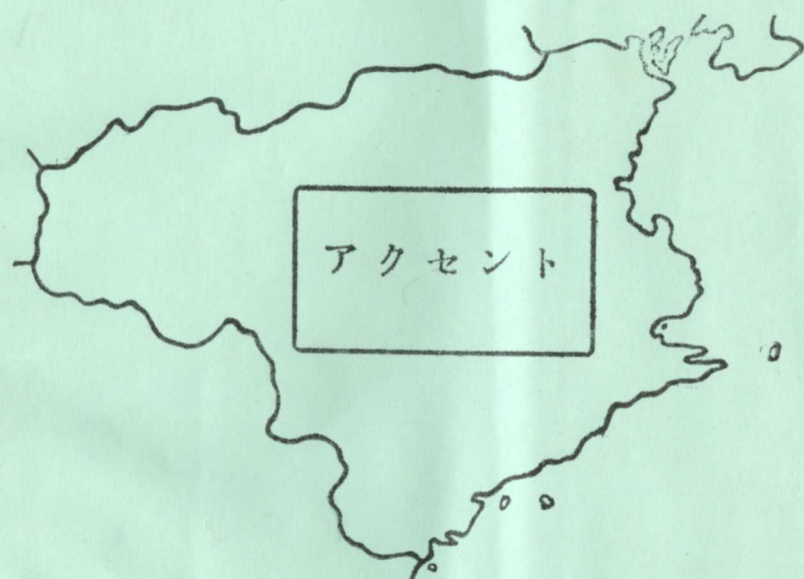




分布図からみた徳島県の方言

105616



徳川宗賢 氏寄贈

森 重 幸

は し が き

本稿は、昭和32年度の大学卒業論文として、徳島県の方言を考察したさいにまとめたものの一部である。

本県の方言研究については、金沢氏をはじめ先学諸氏の有益な成果があるが、本稿も、これらの成果に導かれ、その基礎にたって概観した試みである。

浅学未熟なため 独断的な面が多いと反省するが、今後とも各界の指導をうけて補正したい。

以下、各品詞・語彙・表現・音韻などにおよぶ予定である。

なお、本稿は、国文論叢第七号（神戸大学国語国文学会 — 昭和33年12月）における論文、“徳島県のアクセント概観”と関連している。

1964. 9. 30.

徳島県立成東高等学校夜間部

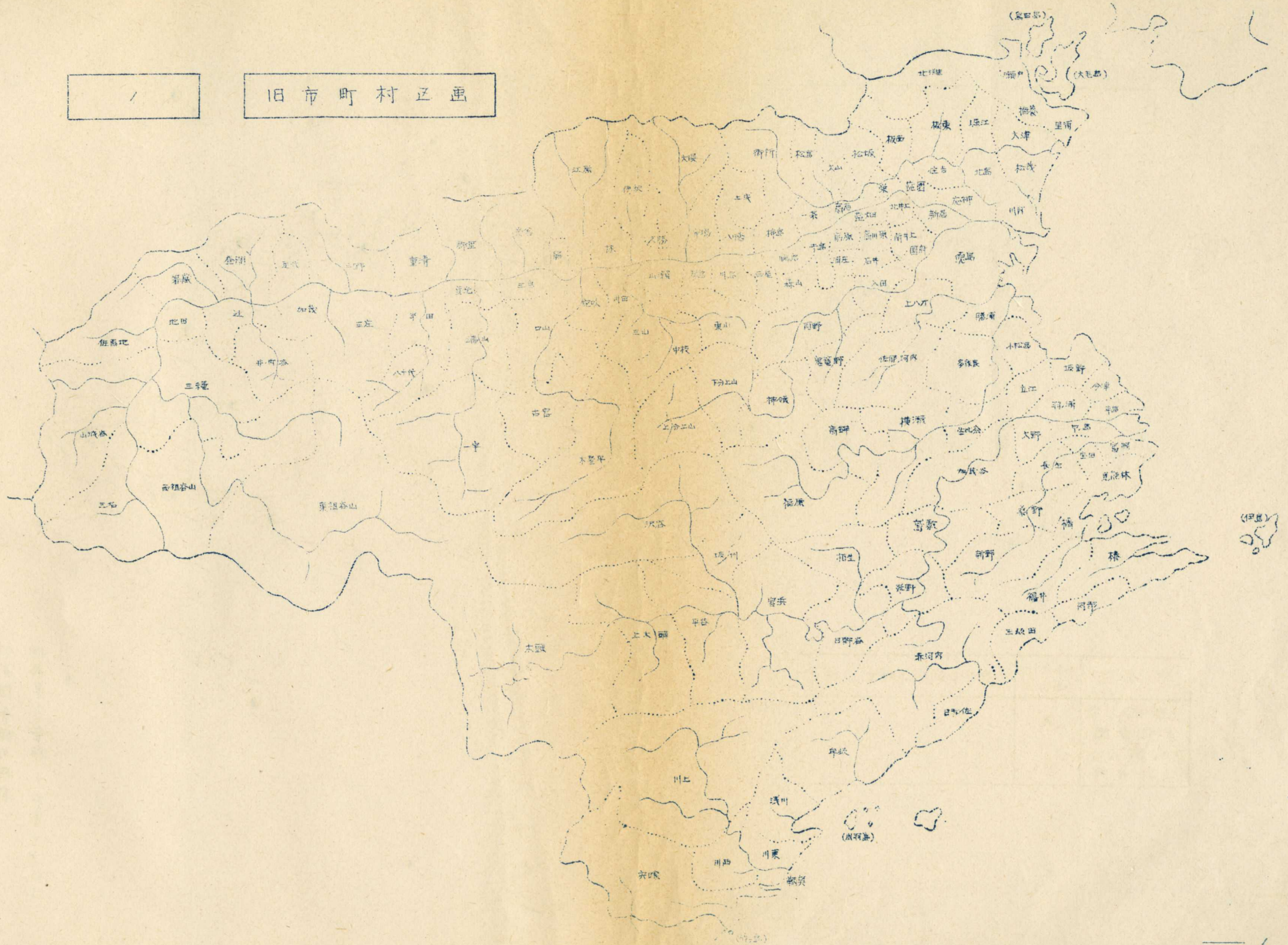
森 重 幸

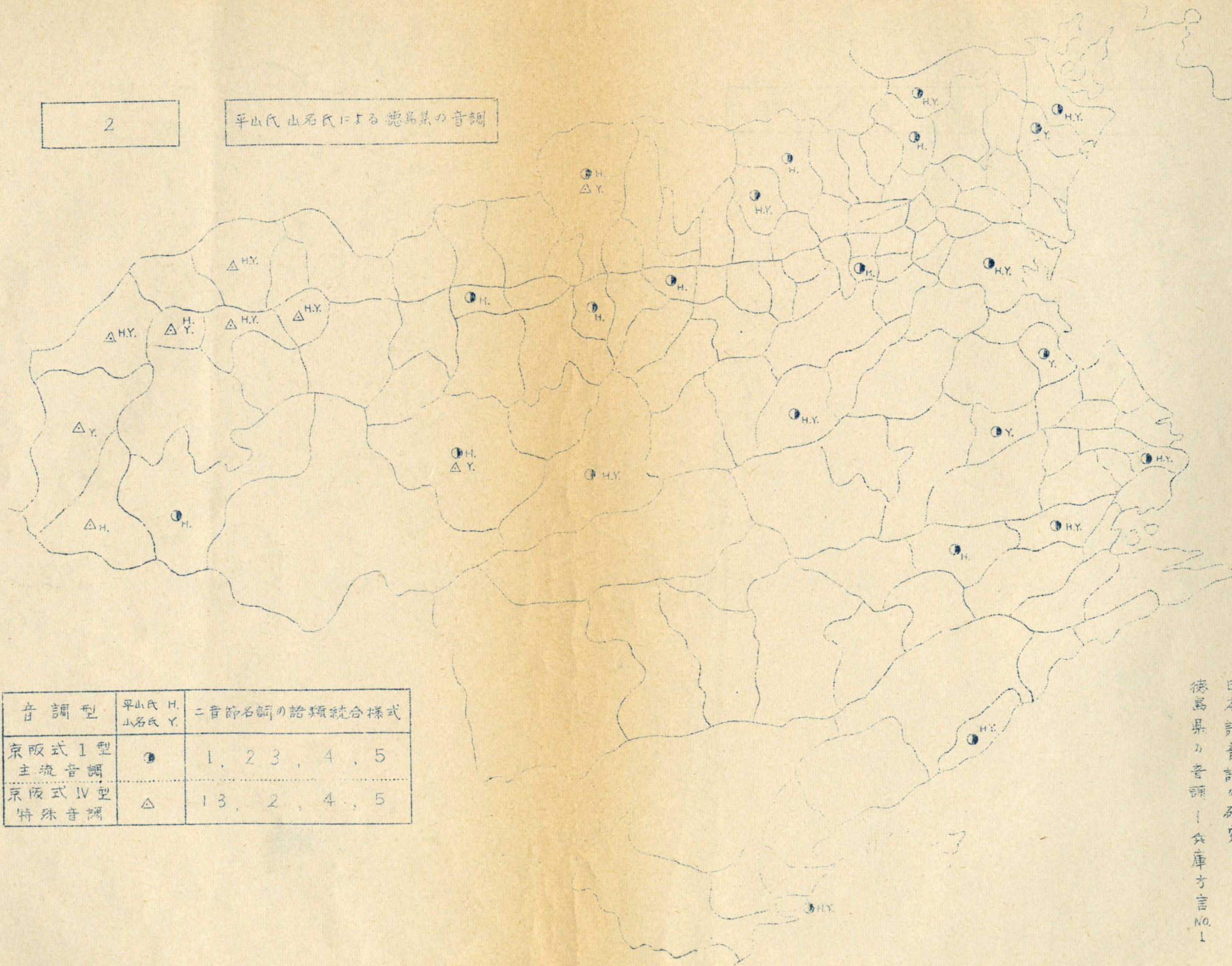
項 目		
1	旧市町村区画	1
2	平山氏・山名氏による徳島県の音調分布	2
3	生田氏・金沢氏その他諸氏による徳島県のアクセント	3
4	アクセント調査地点	4
5	調査語彙	5
6	二音節動詞第一類(A)	6
7	二音節動詞第一類(B)	9
8	二音節動詞第一類の整理	10
9	二音節動詞第二類	11
10	二音節動詞第三類	13
11	二音節動詞のアクセント体系	14
12	三音節動詞第一類(A)	15
13	三音節動詞第一類(B)	21
14	三音節動詞第一類の整理	28
15	三音節動詞第二類(A)	29
16	三音節動詞第二類(A)の整理	33

17	三音節動詞第二類(B)	34
18	三音節動詞第二類(B)の整理	36
19	三音節動詞第三類	37
20	三音節動詞第三類の整理	40
21	三音節動詞のアクセント体系	41
22	二音節形容詞	42
23	三音節形容詞第一類	44
24	三音節形容詞第一類の整理	50
25	三音節形容詞第二類	51
26	三音節形容詞第二類の整理	65
27	三音形容詞のアクセント体系	66
28	徳島県のアクセント概要	67
29	徳島県のアクセント分布図	68

1

旧市町村区画





音調型	平山氏 H. 山名氏 Y.	二音節名詞の語類統合様式
京阪式 I 型 主流音調	●	1, 2 3, 4, 5
京阪式 IV 型 特殊音調	△	1 3, 2, 4, 5

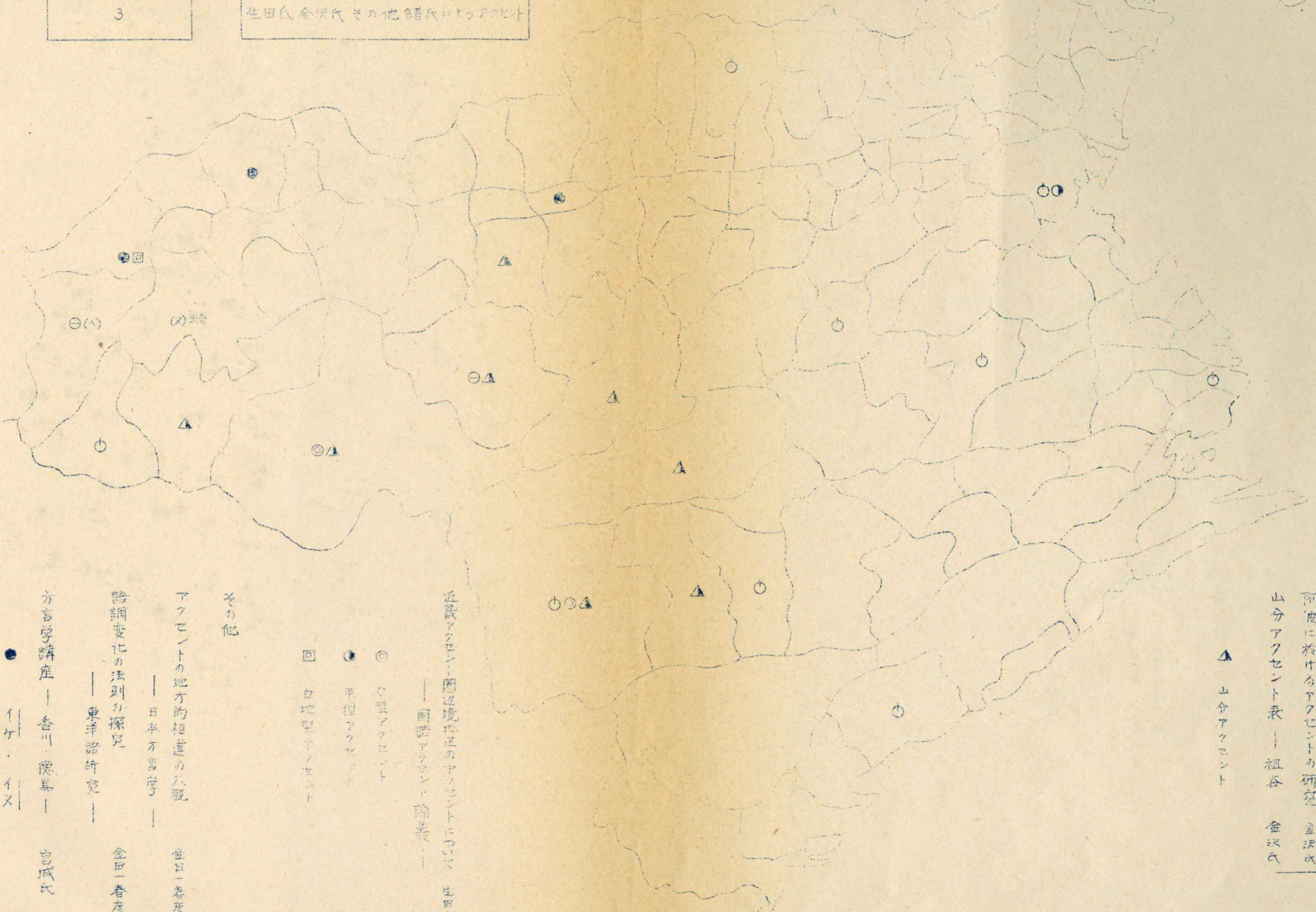
参考文献

日本語音調の研究

徳島県の音調——兵庫方言 No. 1

3

生田氏、金沢氏、その他諸氏によるアクセント



参考文献・その他

阿波に於けるアクセントの研究 金沢氏
山分アクセント表——祖谷 金沢氏

△ 山分アクセント

近畿アクセント周辺境地区のアクセントについて 生田氏
——国語アクセント論叢書——

◎ 型アクセント

● 平型アクセント

○ 白地型アクセント

その他

アクセントの地方的相違の概観 金田一春彦氏
——日本方言学——

語調変化の法則の探究 金田一春彦氏
——東洋語研究——

方言学講座——香川・徳島—— 宮城氏

● イケ・イヌ

○ イケ・イヌ

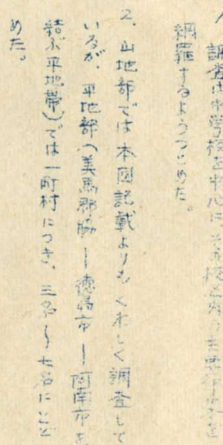
○ イケ・イヌ

日本諸方言アクセントの系譜 試論 徳川氏

(x) 1 2 3 / 4 / 5

(h) 1 3 5 / 2 / 4

アクトセント調査地点



④	小學校所在處
○	小學校所在處
○	主要村落
一	調查中是地

二音節動詞

第一類 (A) 売る · 置く · 買う · 聞く · 咲く · 泣く

巻く · 焼く · 言う · 行く · 割る ·

(B) 寝る · 着る

第二類 (A) 合う · 打つ · 書く · 切る · 食う · 立つ

取る · 飲む · 吹く · 降る · 読む

(B) 出る · 見る · 来る

第三類 居る

三音節動詞

第一類 (A) ^{アガ}上る · 遊ぶ · 登る · 拾う · 運ぶ · 進む

殺す · 変る · 語る · 洗う · 通う · 渡る

当る · 歌う · 遣う

(B) 上げる · 植える · 借りる · 消える · 捨てる · 負ける

染める · 漬ける · 曲げる · 焼ける · 割れる · 腫れる

開ける

第二類 (A) 余る · 痛む · 祈る · 動く · 移る · 恨む

起す · 思ふ · 光る · 守る · 作る · 養ふ

通る · 習う · 照らす

(B) 生きる · 起きる · 落ちる · 覚める · 過ぎる · 建てる

附ける · 溶ける · 投げる · 逃げる · 延びる · 晴れる
見える

第三類 歩く · 隠す · 入る · 参る

二音節形容詞

無い · 良い · 酸い · 濃い

三音節形容詞

第一類 赤い · 浅い · 甘い · 荒い · 重い · 軽い

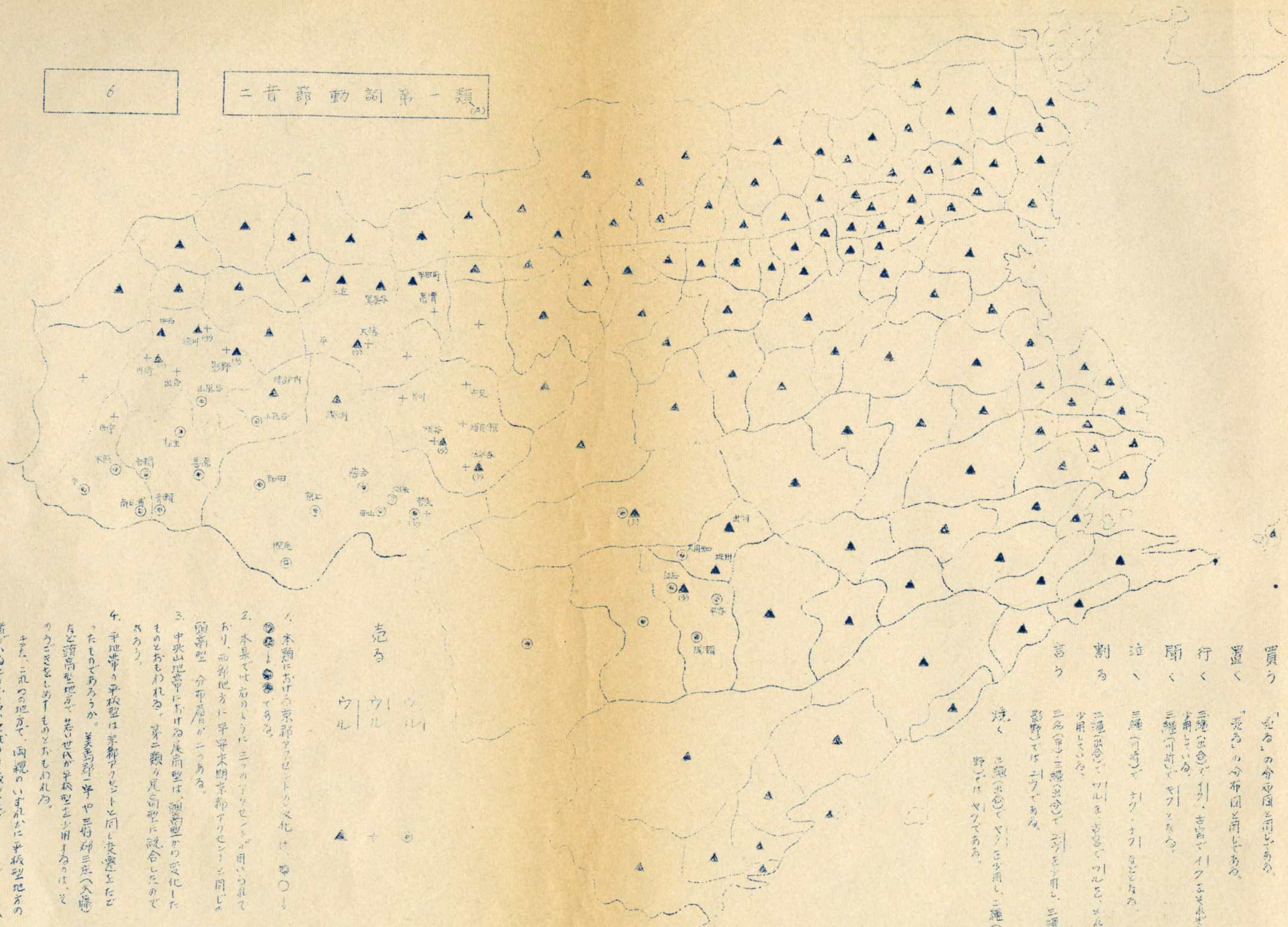
丸い · 厚い · 薄い · 遅い · 堅い · 遠い

第二類 青い · 暑い · 清い · 黒い · 寒い · 白い

狭い · 高い · 近い · 強い · 長い · 早い

安い · 古い · 細い

以上合計 118



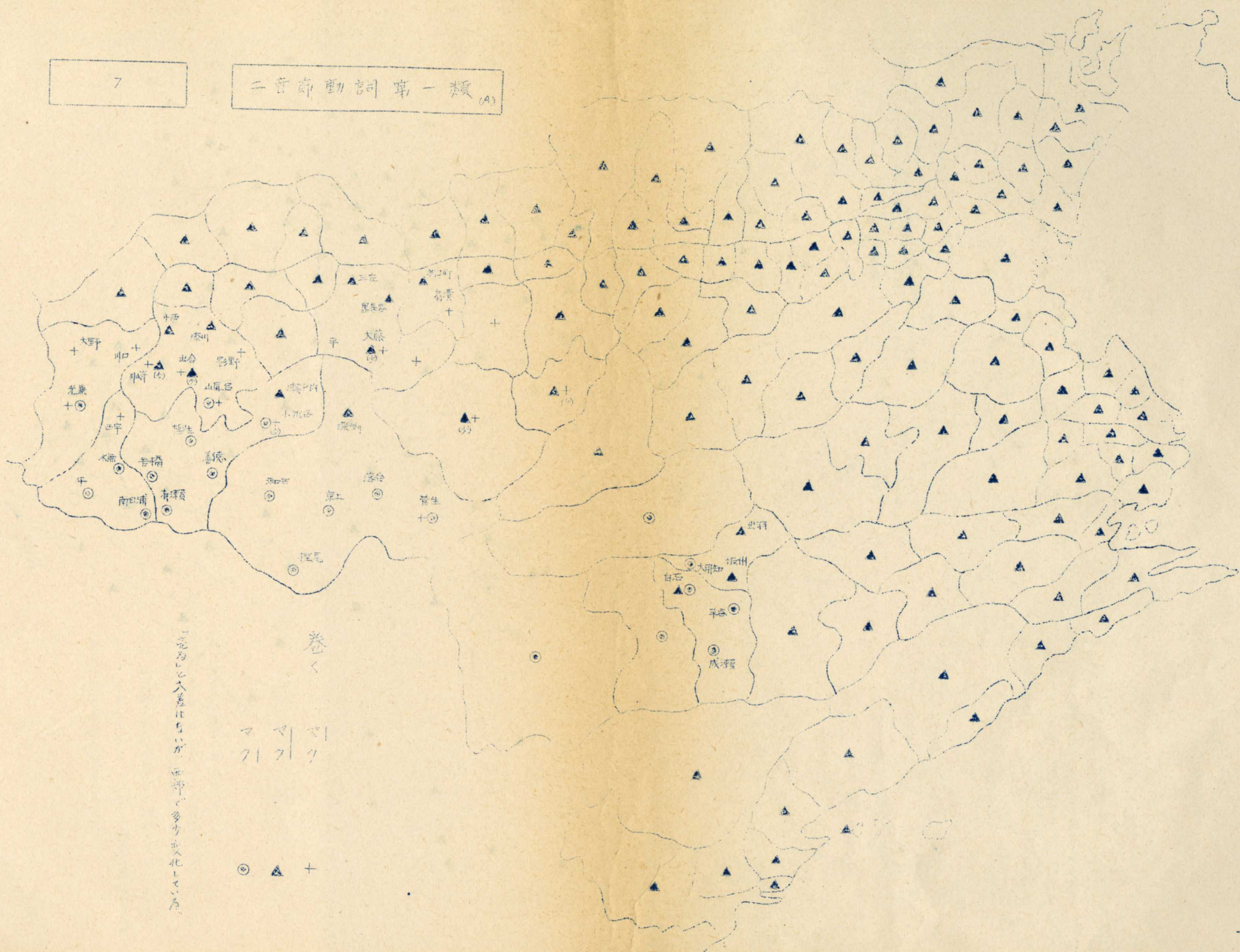
買う 売る の分や同と用いある。
置く 売る の分や同と用いある。
行く 三連(五合)でイク、古語でイクもそれと用いある。
聞く 三連(可成)でヤフとなる。
泣く 三連(可成)でナク・ナフとなる。
割る 三連(五合)でワルもさうでワルと、それと少用している。
言う 三連(五合)でエウもさうでエウと、それと少用している。
焼く 三連(五合)でヤクもさうでヤクと、それと少用している。
野(ノ)はヤフである。

売る
ウル
ウル
ウル

1. 本類における京都アワセント文化は、●○
2. 本類では、たうらうに三つのアワセントが用いられ、
3. 中央山地帯における度高型は、(五合)型から変化して
4. 平地帯の平板型は、京都アワセントと同じ変遷をたど
たものである。また、三好郡一守や三好郡三庄(大幡)
など、高台型地方で、若くは時代が平板型を少用するものは、そ
のうきさきしめすものとおもわれる。
また、三好郡の地方で、両親のいすれかに平板型地方の
着が、いすれかに、若い世代の平板型化がすすんで、場合も
三、四例みられた。

7

二音節動詞第一類 (A)

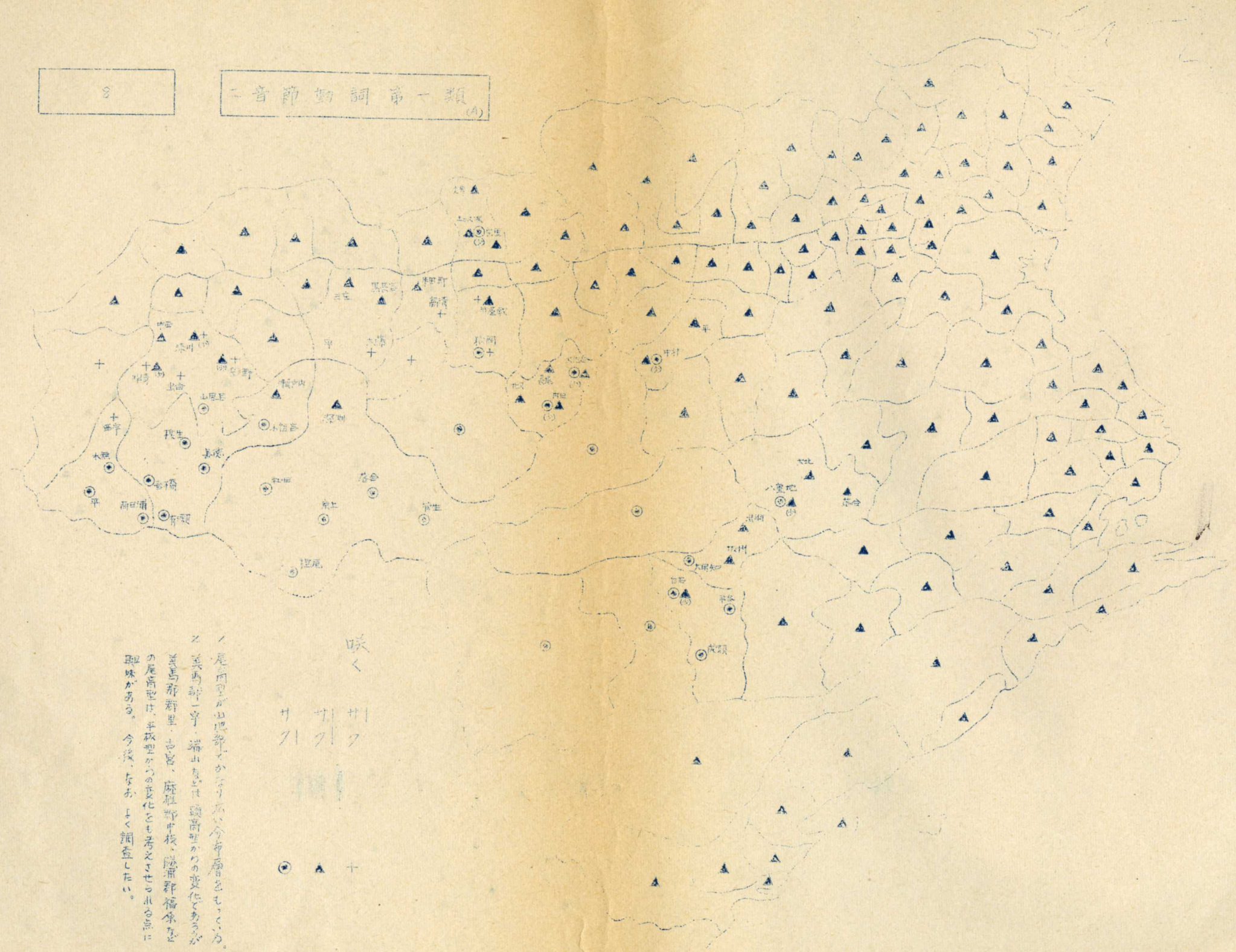


「元」の「入」は「ない」が、西部で多少変化している。

巻く

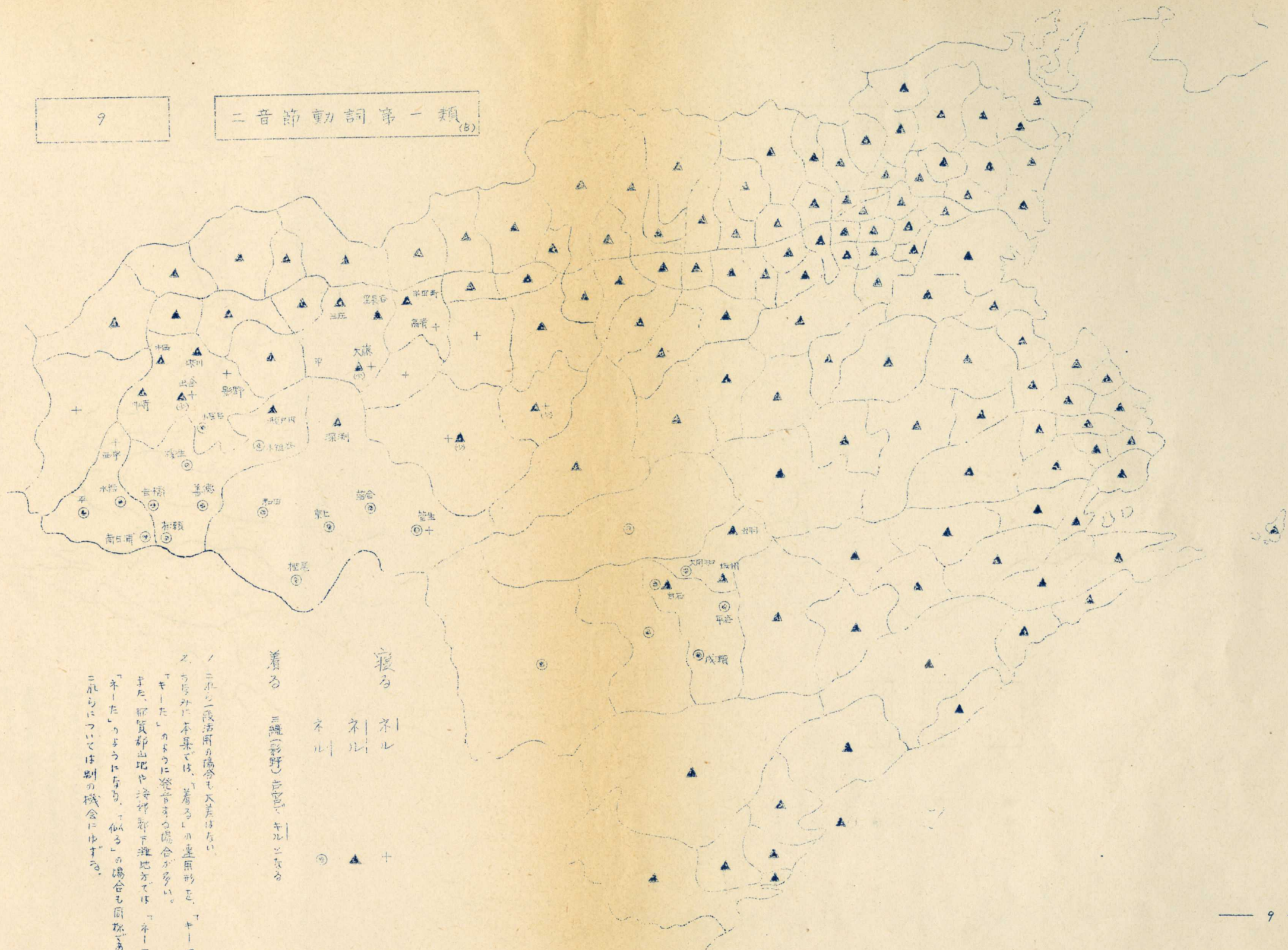
マ マ マ
ク ク ク

◎ ▲ +



ノ尾形が山形県でかなりない今所層をもつて、
ノ尾形一守、端山などは、讀高型からの変化であるが
美濃郡、美濃郡、美濃郡、美濃郡、美濃郡、美濃郡、
の尾形は、平型からの変化とも考えられる点に
興味がある。今後、なおよく調査したい。

咲く
サ | サ | サ |
リ | リ | ク
● ▲ +

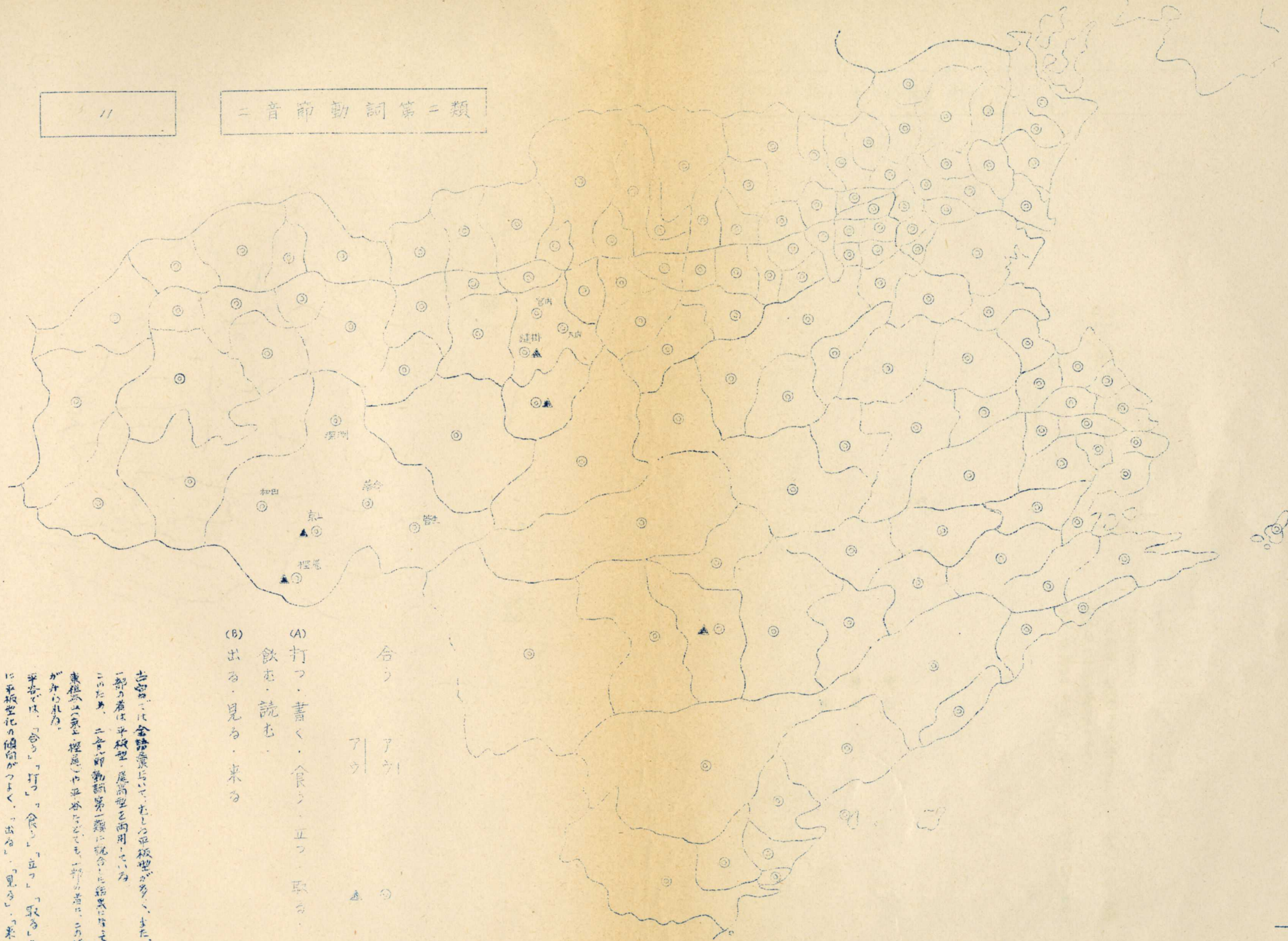


着る 三體(彩野) 着る 着る
 寝る 寝る 寝る
 ネル ネル
 ネル
 ノニル二音節動詞の場合も大抵は無い。
 又、うなみに本集では、「着る」の連用形を「キーテ」
 「キーた」のように発音する場合が多い。
 また、霞ヶ浦山北や津軽郡下津地などでは「ネーテ」
 「ネーた」のようにあり、「似る」の場合も同様であるが、
 これらについては別の機会にゆずる。

10

二音節動詞第一類の整理

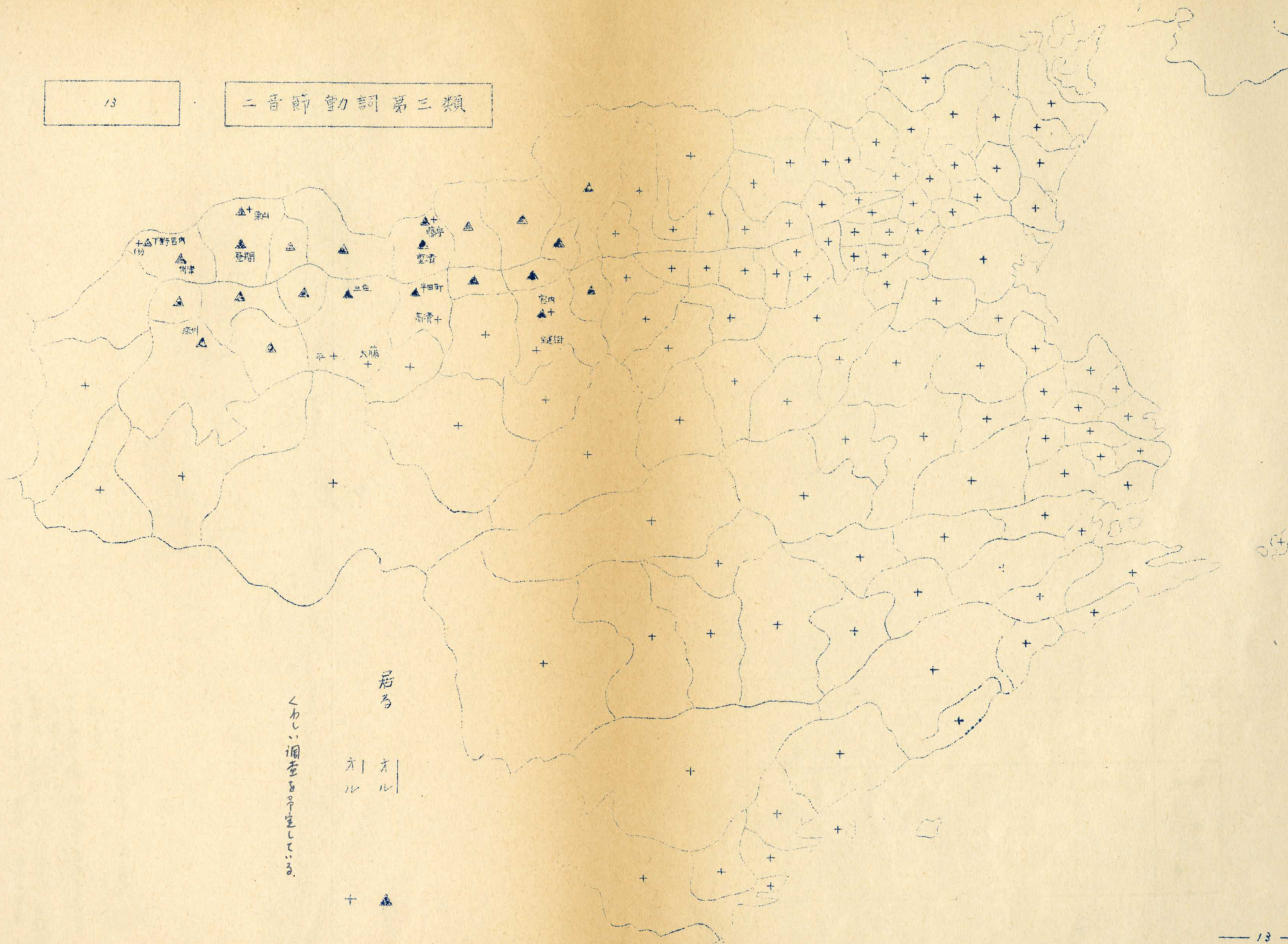




- (A) 打つ・書く・食う・立つ・取る・
飲む・読む・
(B) 出る・見る・来る

合う
アウ
アウ
アウ

古語には全語彙にわたる平仮型が多々、また、一部の者は平仮型・片仮型を両用している。このため、二音節動詞第一類に就いては結果に若干の差が生ずる（東京・熊本・徳島）や平仮型などでも、一部の者は、その傾向がみられる。平仮では、「合う」「打つ」「食う」「立つ」「取る」などは平仮型化の傾向が著しく、「出る」「見る」「来る」などは少ない。

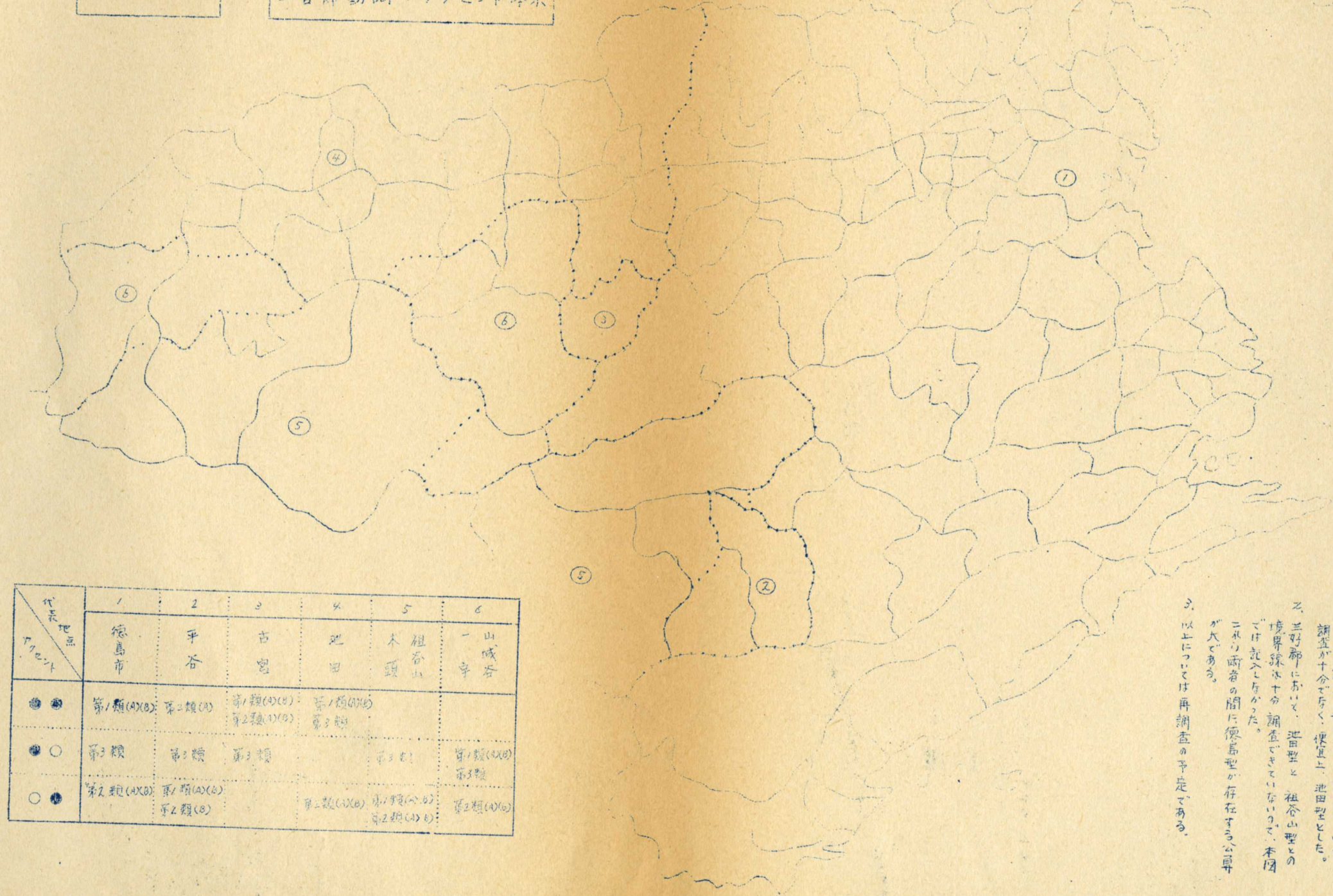


居る

オル
ル

+

くわしい調査をうけています。



代表地点 アクセント	1 徳島市	2 平谷	3 古宮	4 池田	5 木祖 山	6 一山 城谷
● ●	第1類(A)(B)	第2類(A)	第1類(A)(B) 第2類(A)(B)	第1類(A)(B) 第2類		
● ○	第3類	第3類	第3類		第3類	第1類(A)(B) 第3類
○ ●	第2類(A)(B)	第1類(A)(B) 第2類(B)		第2類(A)(B)	第1類(A)(B) 第2類(A)(B)	第2類(A)(B)

1. 口山は徳島市型であるが、前記の如く、調査が十分でなく、便宜上、池田型とした。
 2. 三好郡において、池田型と、祖谷山型との境界線は十分調査できていないので、本図では記入しなかった。
 3. これら両者の間に徳島型が存在する公算が大きい。
 4. 以上については再調査の予定である。



運ぶ
井内者で平級型ノ升・三注(父儀)で調子型ノ升
を用いてゐる。

語る
驚歎・古風には頌高型が少用される。

洗う
おもて頭巾を少用し、三左(大藤)で専用する。

渡り
洗うの場合同じ。

歌う
就多數の古歌では頭高型が少用されている。

殺す
「蓮」の場合と同じ。

進む
運ぶの場合と同じ。

違
う

三野・壺清・郡里・古宮・鷲敷・須高
にちることもある。また、三庄（大膳）では、
須高郡のかたである。

当
る

ア
ク
ル

71
7
16

7
41
12

1. 本嶺の東傾アモエトは、**南傾**○↓**南傾**帯→**南傾**帯
 である。
 2. 本嶺の場合も、平坂型地方がないが、西部よりの地方はかなり
 変化している。
 3. **端山三連**、一平、山城各などの**頭山型**、**中南部型**が、**頭**
山型から変化したのか、あるいは平坂型から変化したの
 かは、今もところよくわからない。
 4. 貞光川流域で、下流地方から上流にかけて、平坂型、
頭山型、**中南部型**が、今存するものは、その成立過程を
 しめすものではなからうか、これはつゞいて今後調査
 してやりたい。
 5. 中央山地帯の良南型は、平坂型から変化したものと
 おもわれる。良南型が平坂型で、後者がさう良南型
 の若もかなりあるようだった。

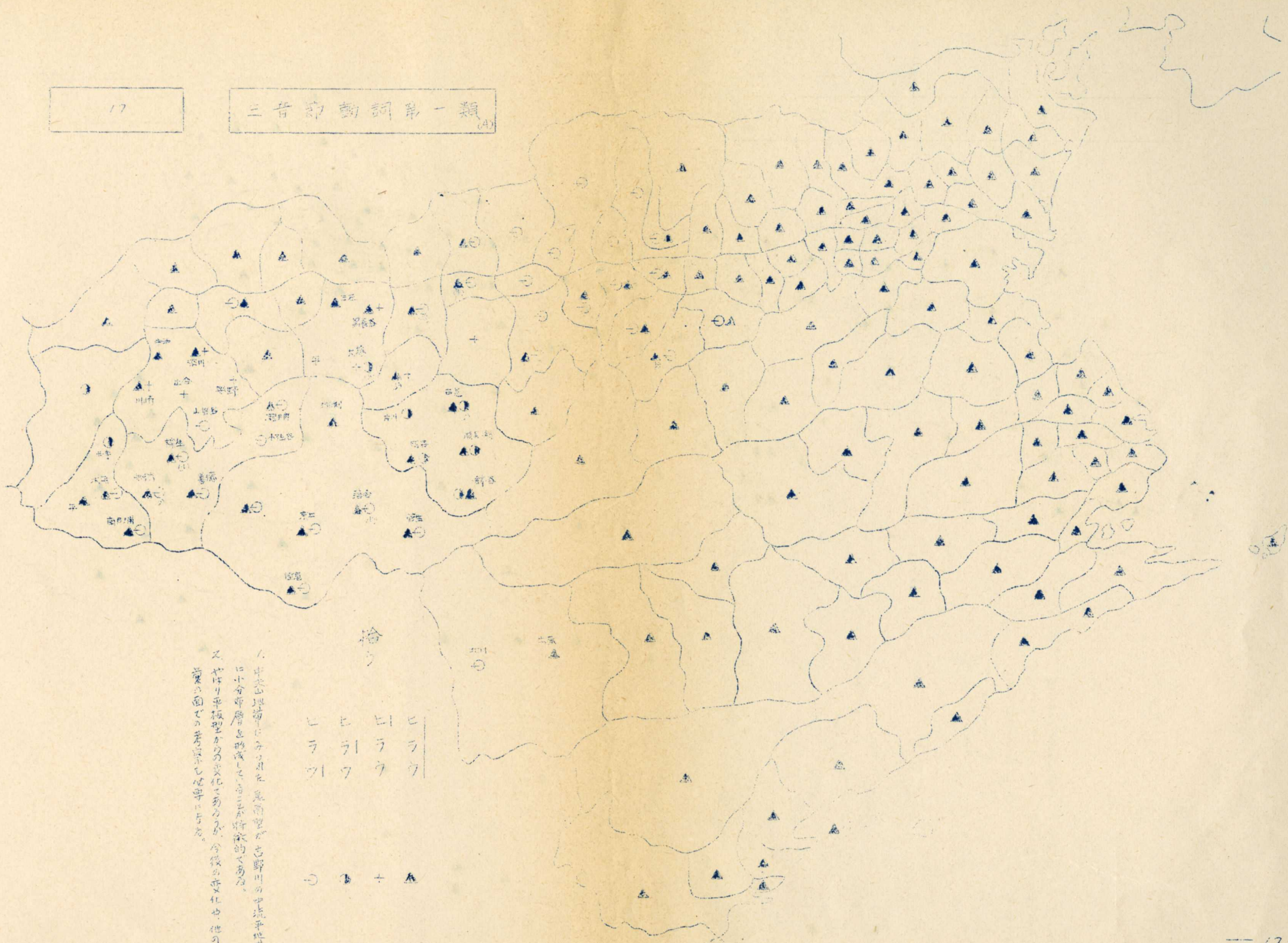


通う

カヨウ
カヨウ
カヨウ
カヨウ

△ + ○ ●

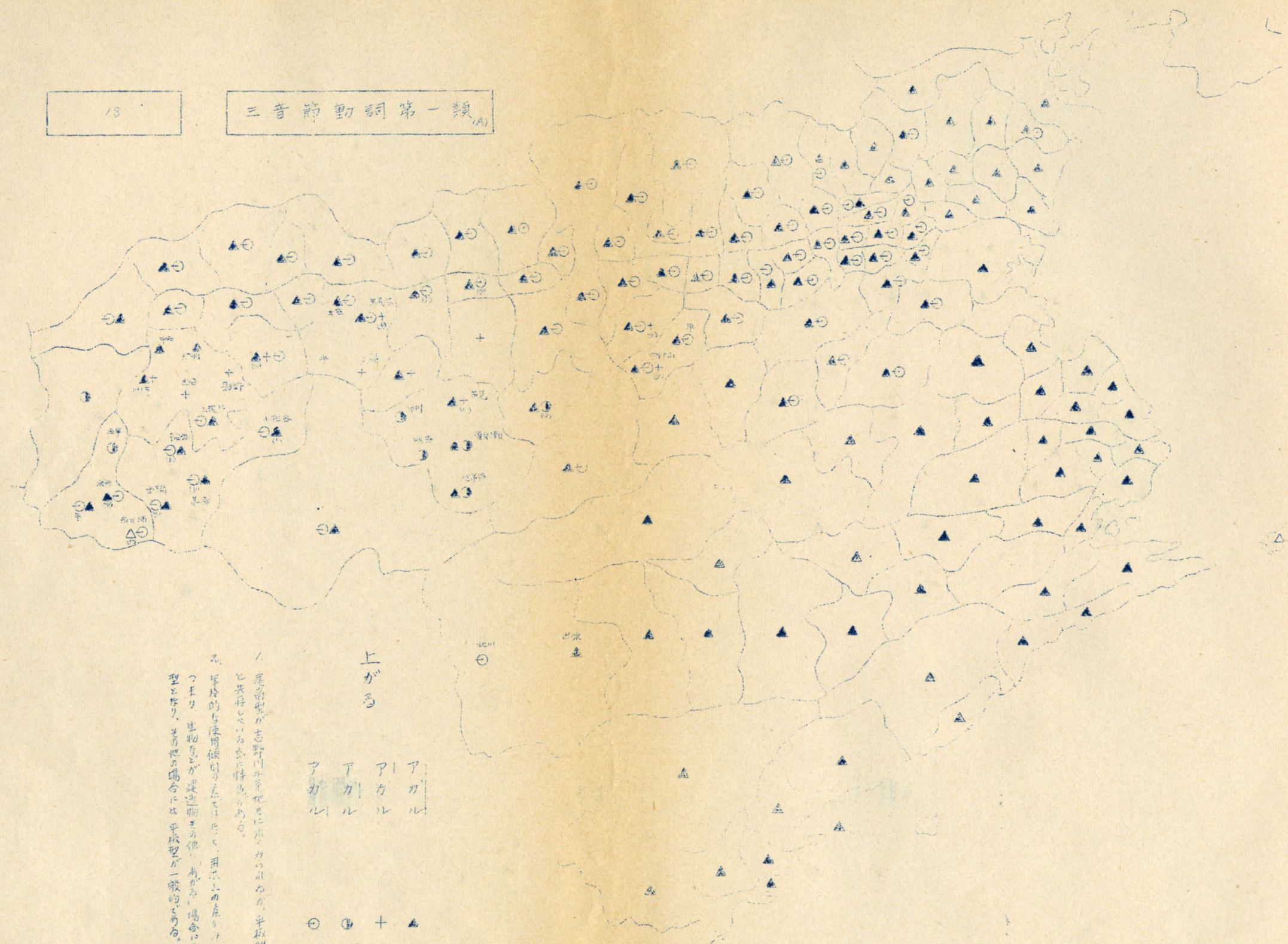
この調査の結果、西部地方は「カヨウ」でなく、東部地方に
「カヨウ」が多い。これは、平仮名からの変化である。今後、注意するべき
がある。



中央山地帯にみられる尾形型が古野川の中央平野地帯に小分郡層を形成してゐることが特徴的である。スヤは平振型からの変化であるが、今後の変化や他の諸言葉の面での考察が必要である。

拾う

ヒラウ	ヒラウ	ヒラウ	ヒラウ
ヒラフ	ヒラフ	ヒラフ	ヒラフ
ヒラフ	ヒラフ	ヒラフ	ヒラフ
ヒラフ	ヒラフ	ヒラフ	ヒラフ

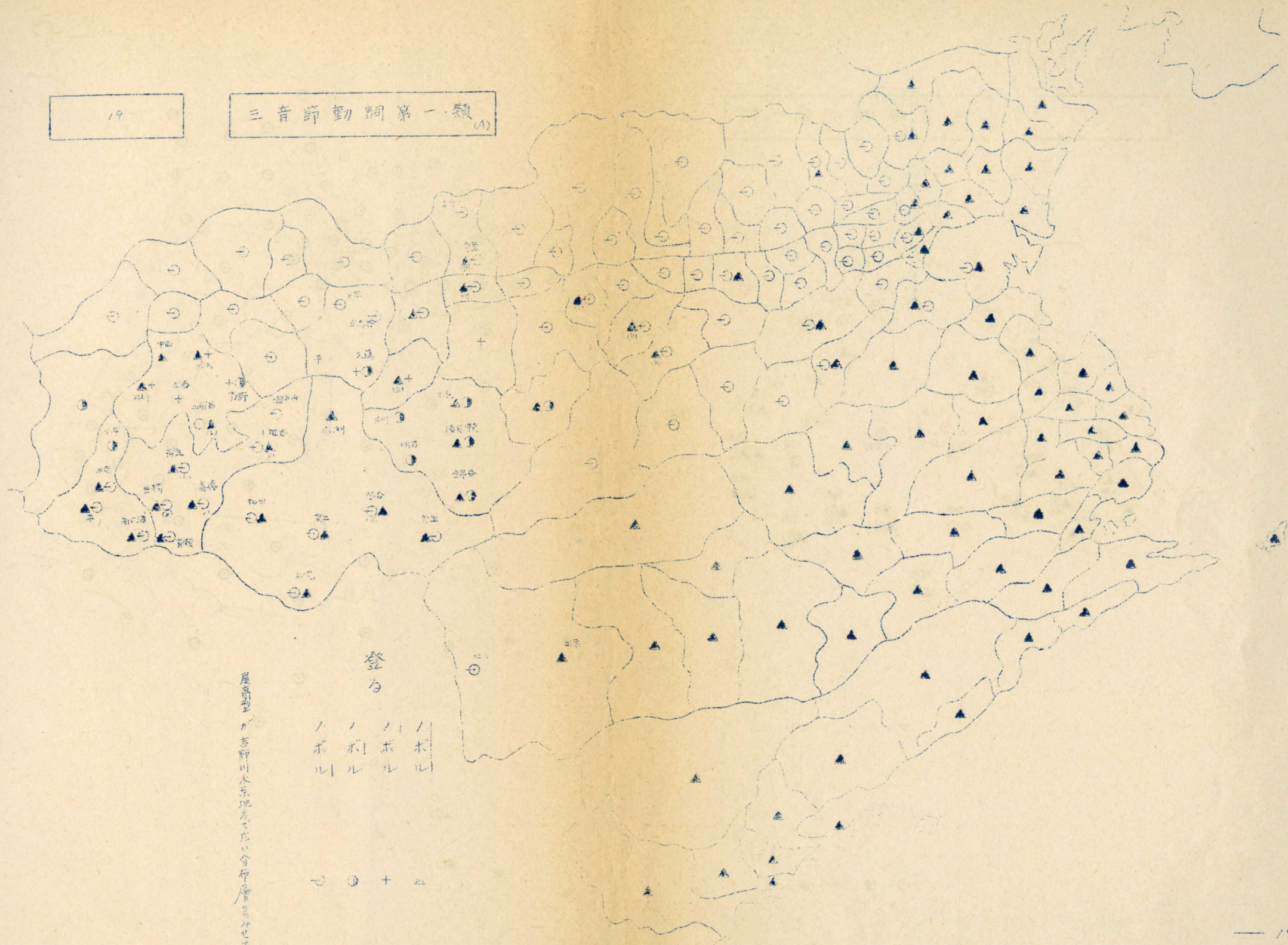


上がる

ア
カル
ア
カル
ア
カル
ア
カル

⊙ ⊕ + ▲

ノ尾音型が志野川外を他方に流れるが、平仮型と共有している点に特色がある。
 年令的・使用傾向の差は、用字上の差が主である。つまり、生物などが建造物より他にある場合、尾音型となり、その他の場合には平仮型が一般的である。



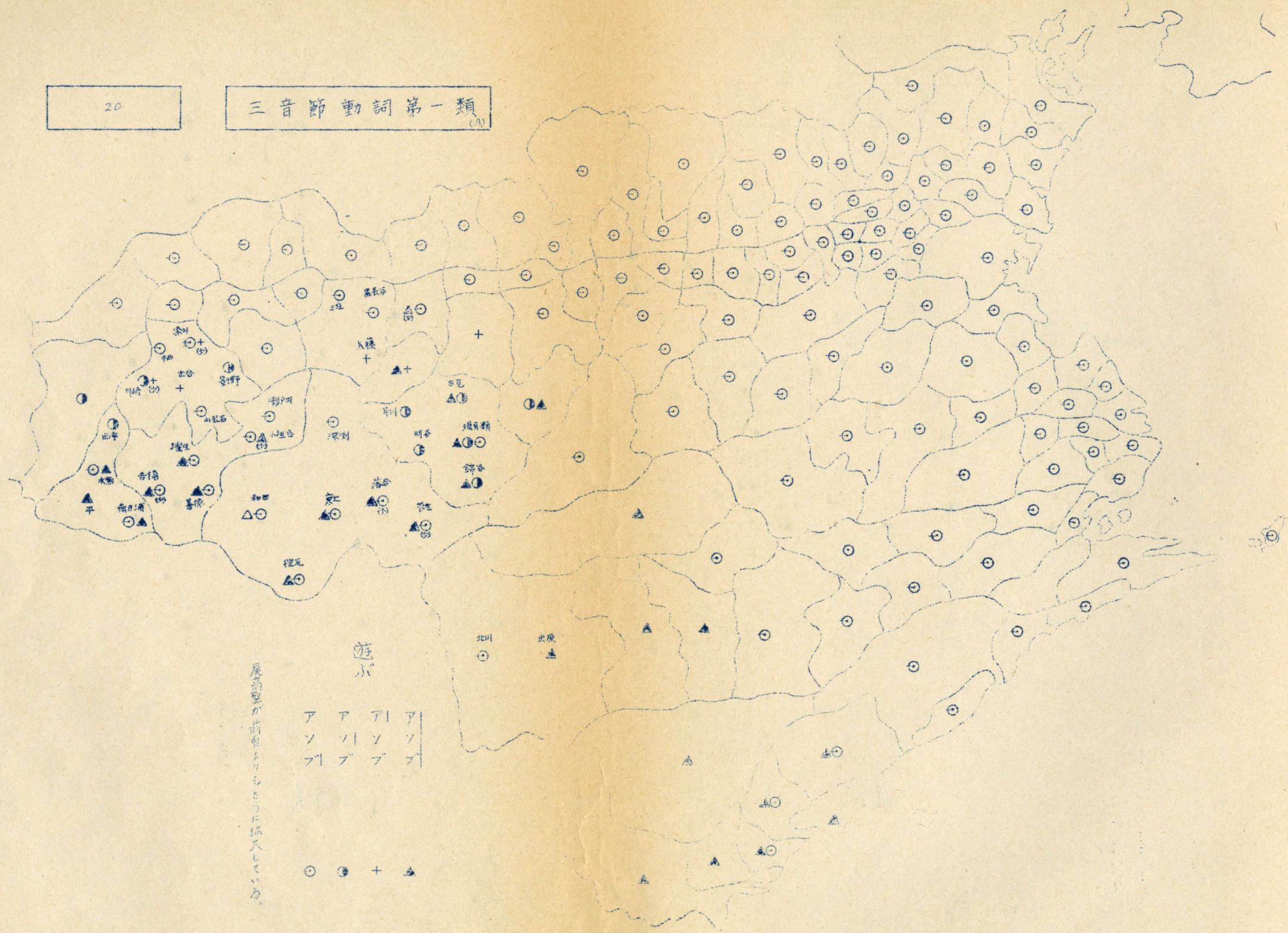
登る

ノ
ボル
ノ
ボル
ノ
ボル
ノ
ボル

○ ◎ + △

尾高型が吉野川水源地まで広い分布域をみせている。

三音節動詞第一類

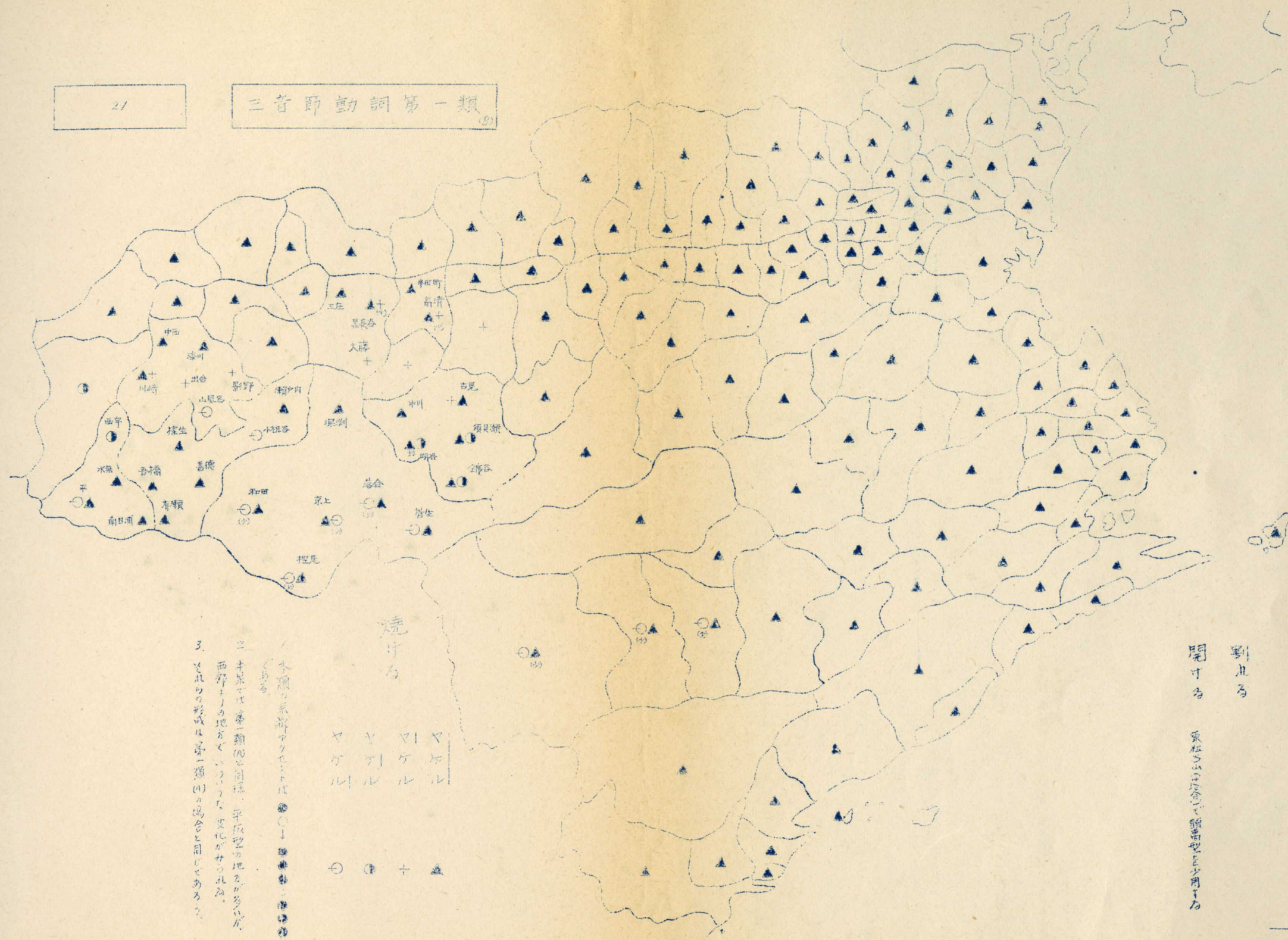


遊ぶ

ア	ア	ア	ア
ソ	ソ	ソ	ソ
ブ	ブ	ブ	ブ

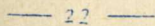
○ ● + △

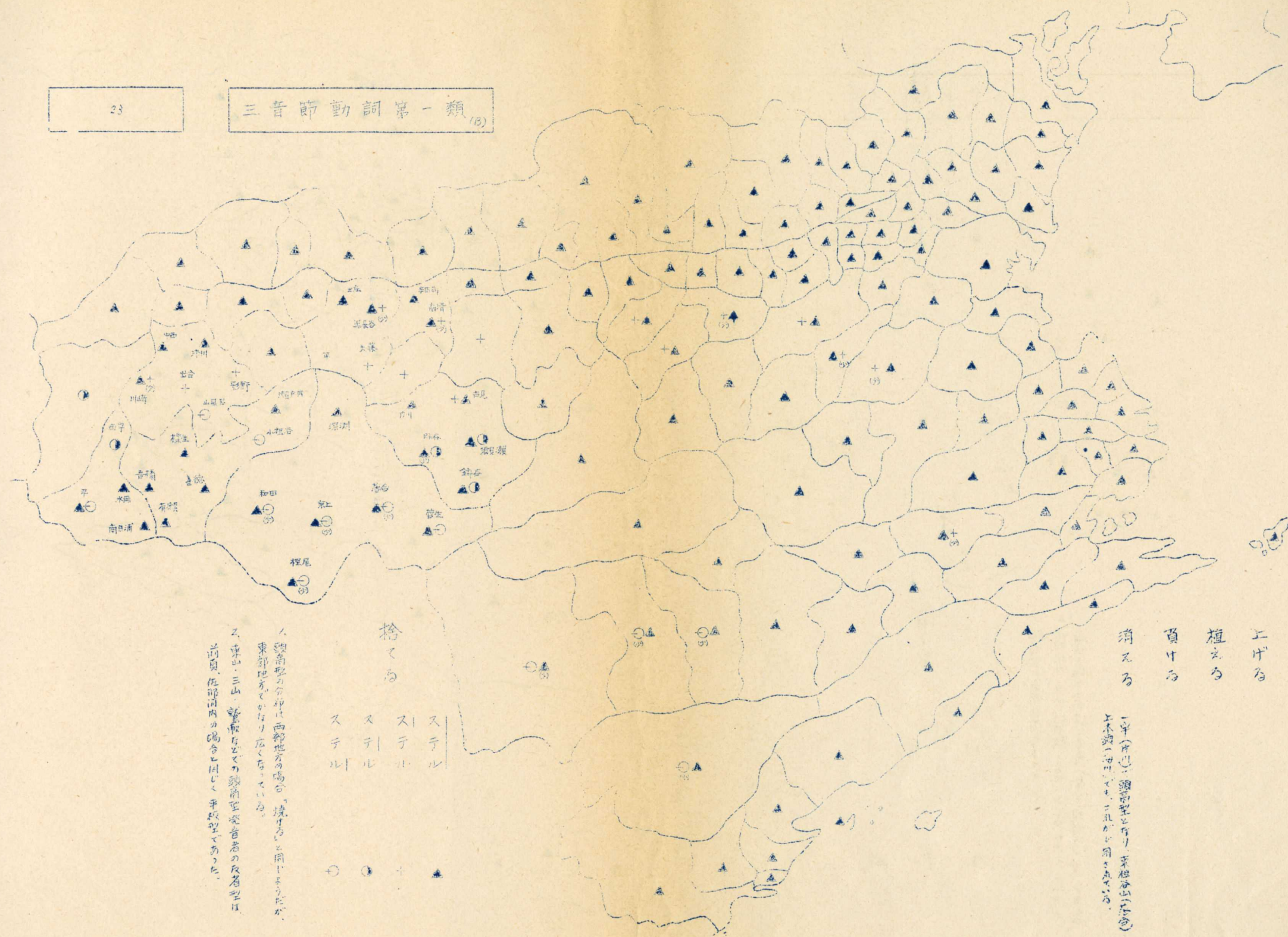
展覧會が、東京より、もたらした品々について

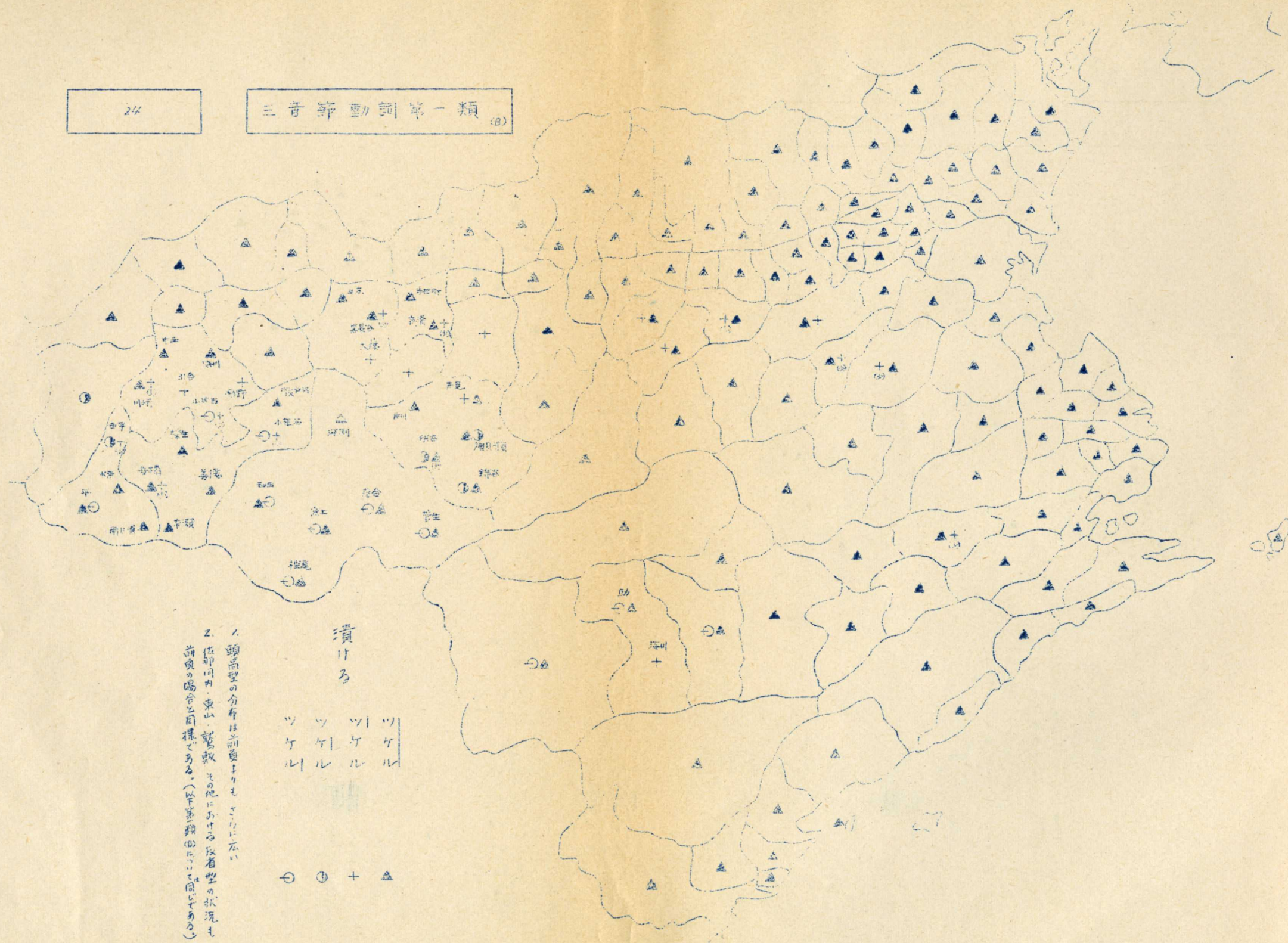


割
開

東松山(中)合して、類型と少用する





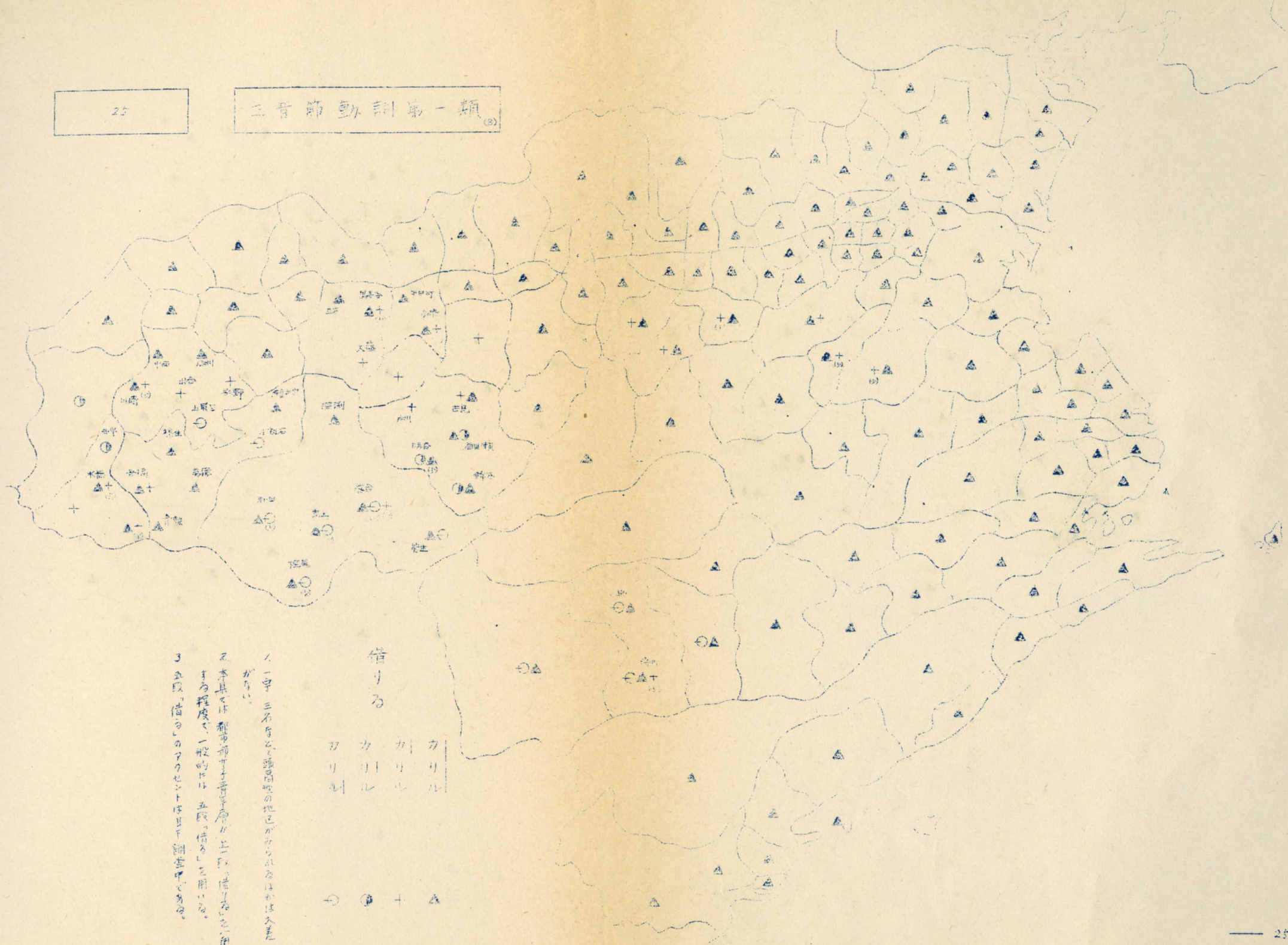


潰ける

ツケル
ツケル
ツケル
ツケル

△ + ⊙ ⊖

1. 頭音型の分布は前音より大きくない
2. 依り同内、東山、新島、その他における方言型の状況も
前音の場合と同様である。(以下省略の記号も同様である)

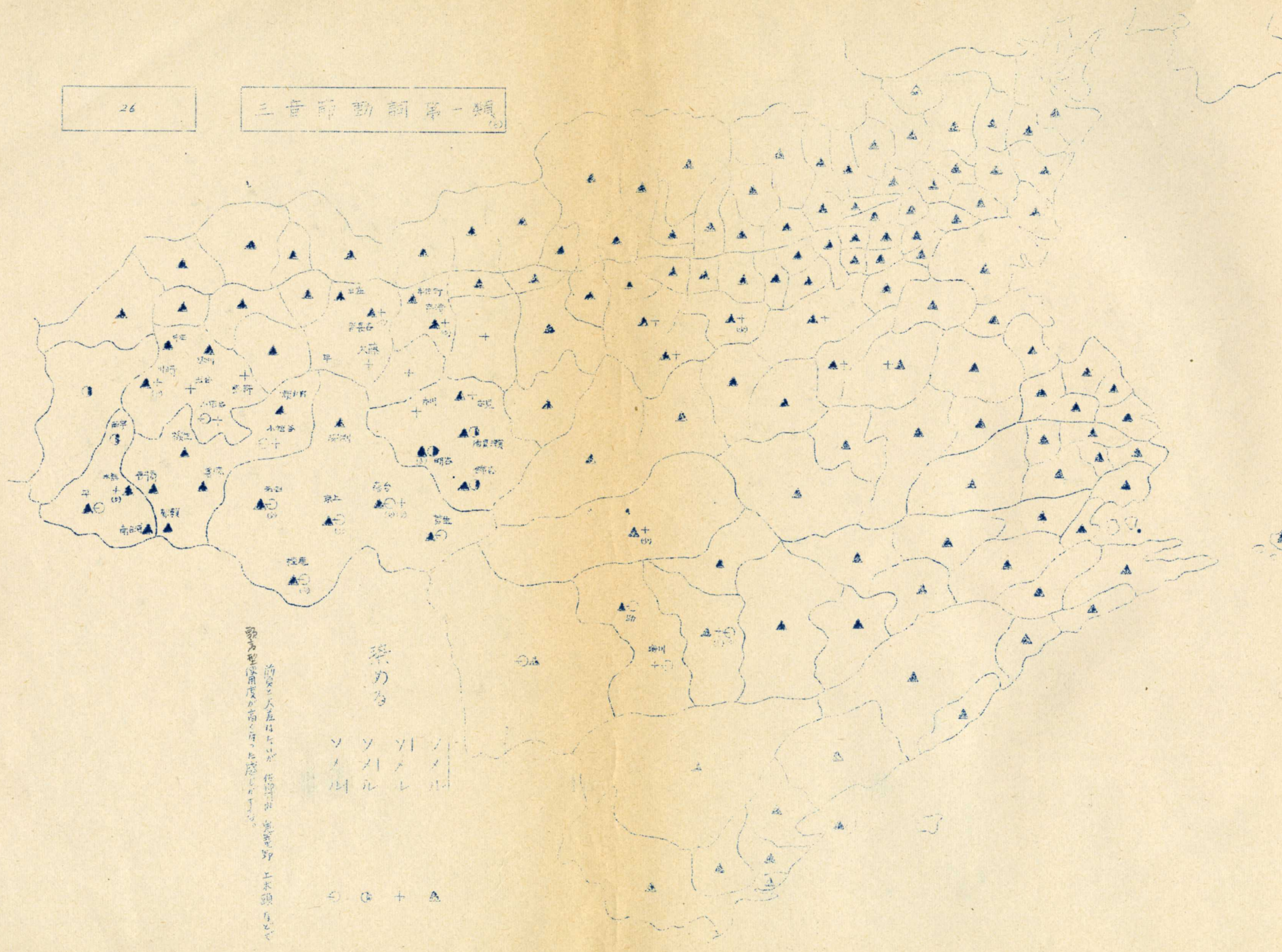


借りる

カリル
カリル
カリル
カリル

○ ⊕ + △

1. 二字 三音節とて強固な地位が与えられるはかばか
 2. 本県では、都府県市町村を音節の上二段に借りるに
 する程度で、一般的には五段に借りるに用いる。
 3. 五段に借りるのアクセントは、調査中である。

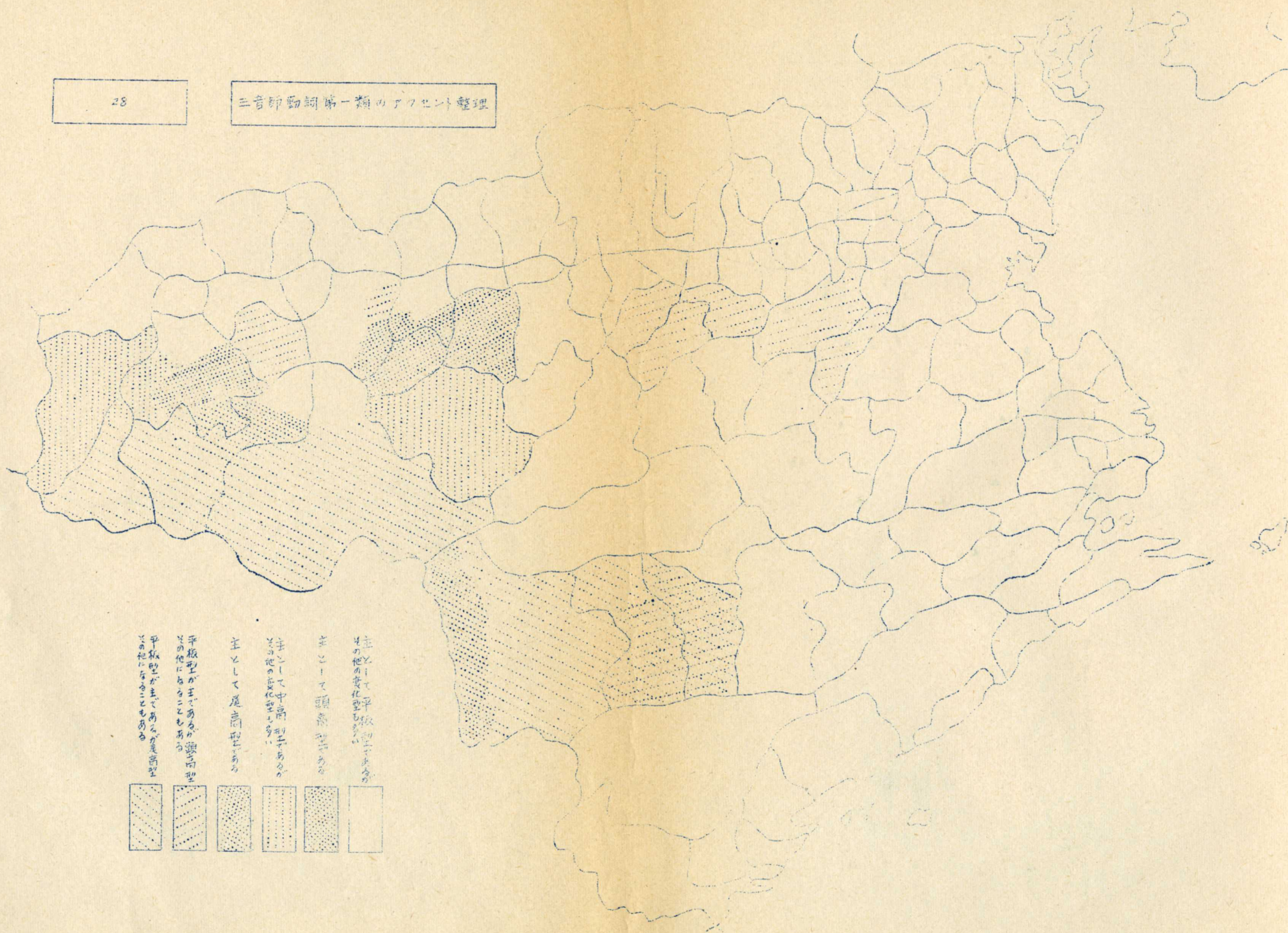


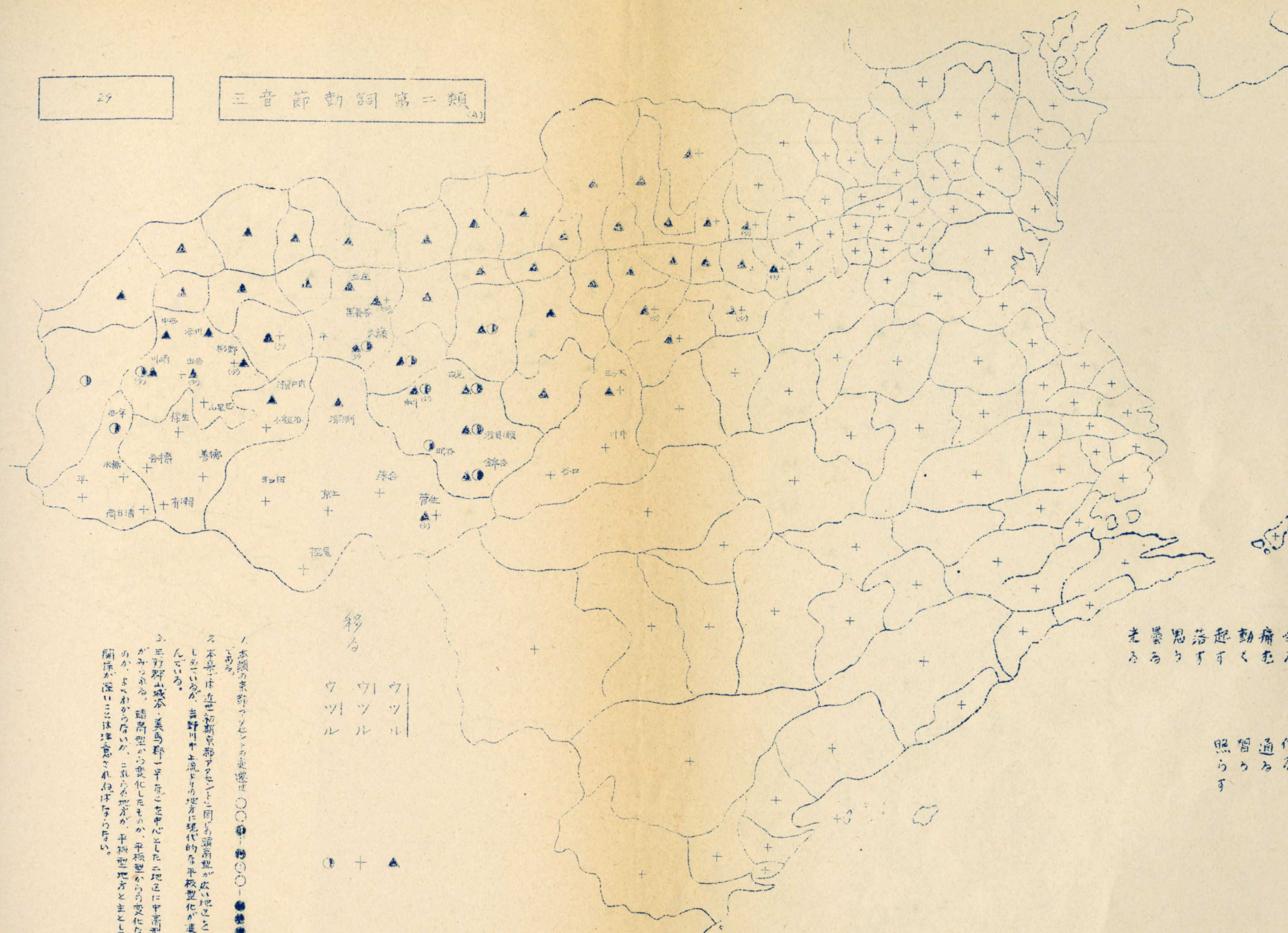
染める

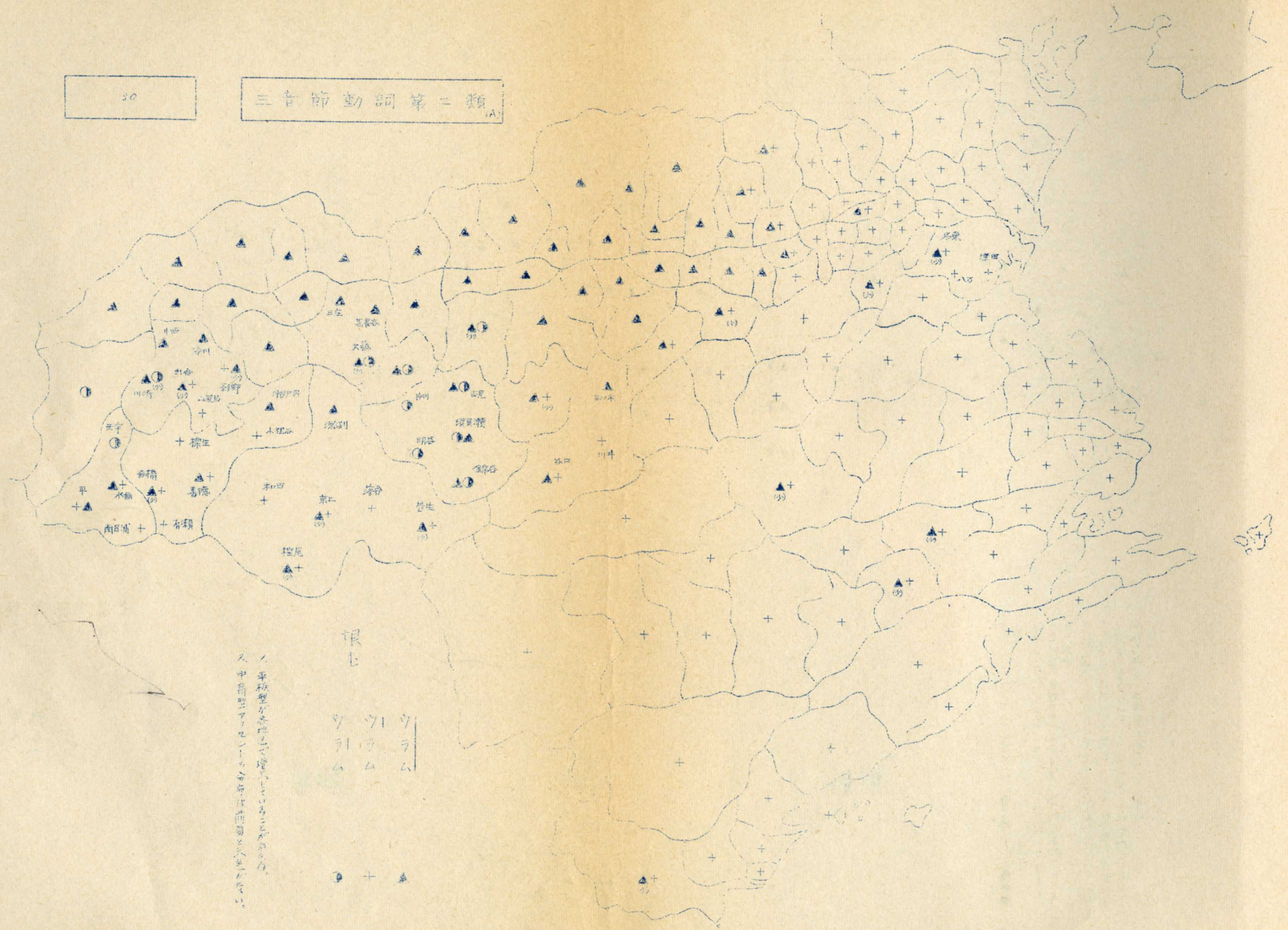
ソノル
ソノル
ソノル
ソノル

△ ○ +

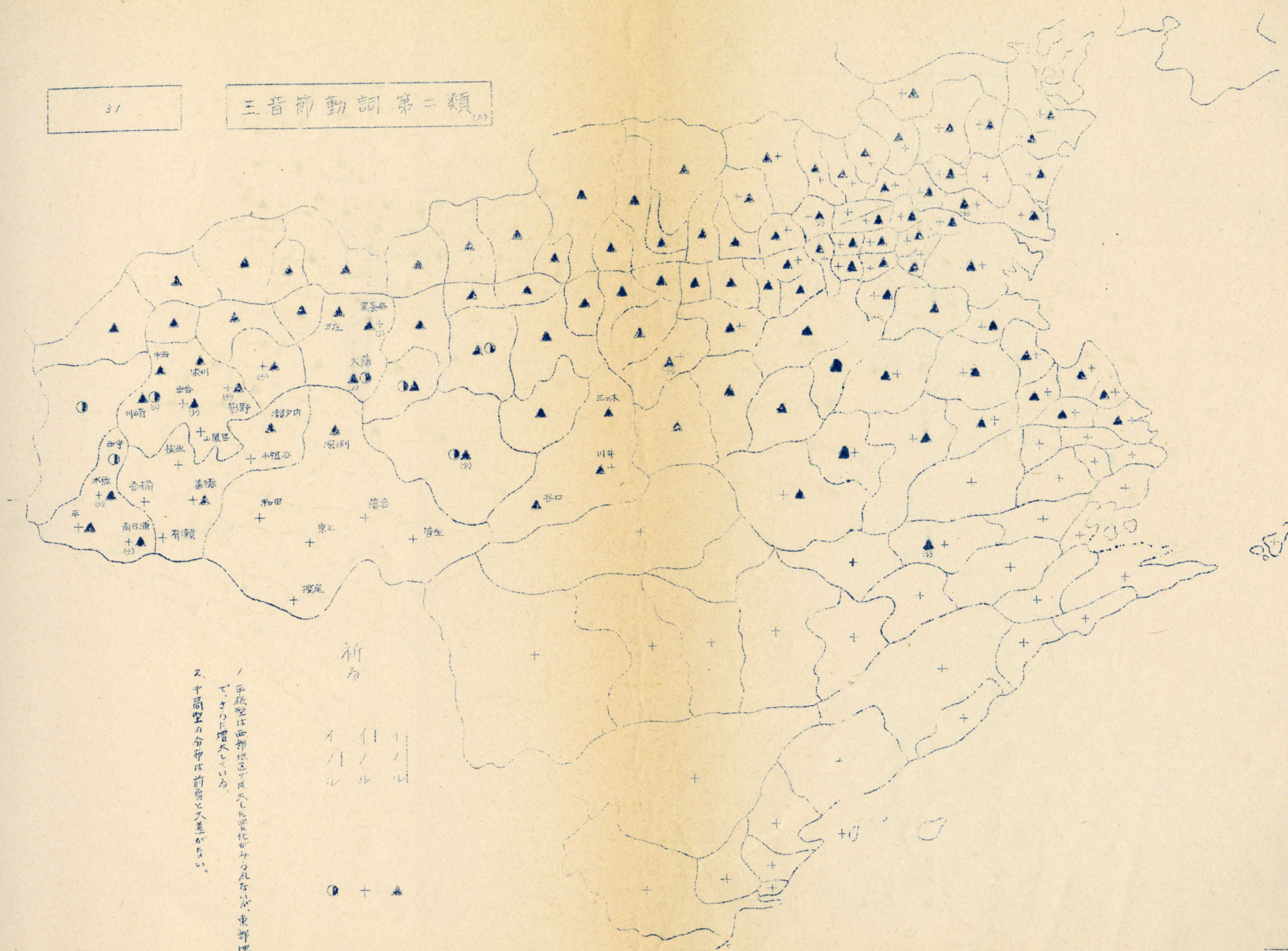
前記の大字は、低地が、関東野、上水頭、尾、
動方型使用度が高、と感ぜられ、







三音節動詞 第二類 (A)

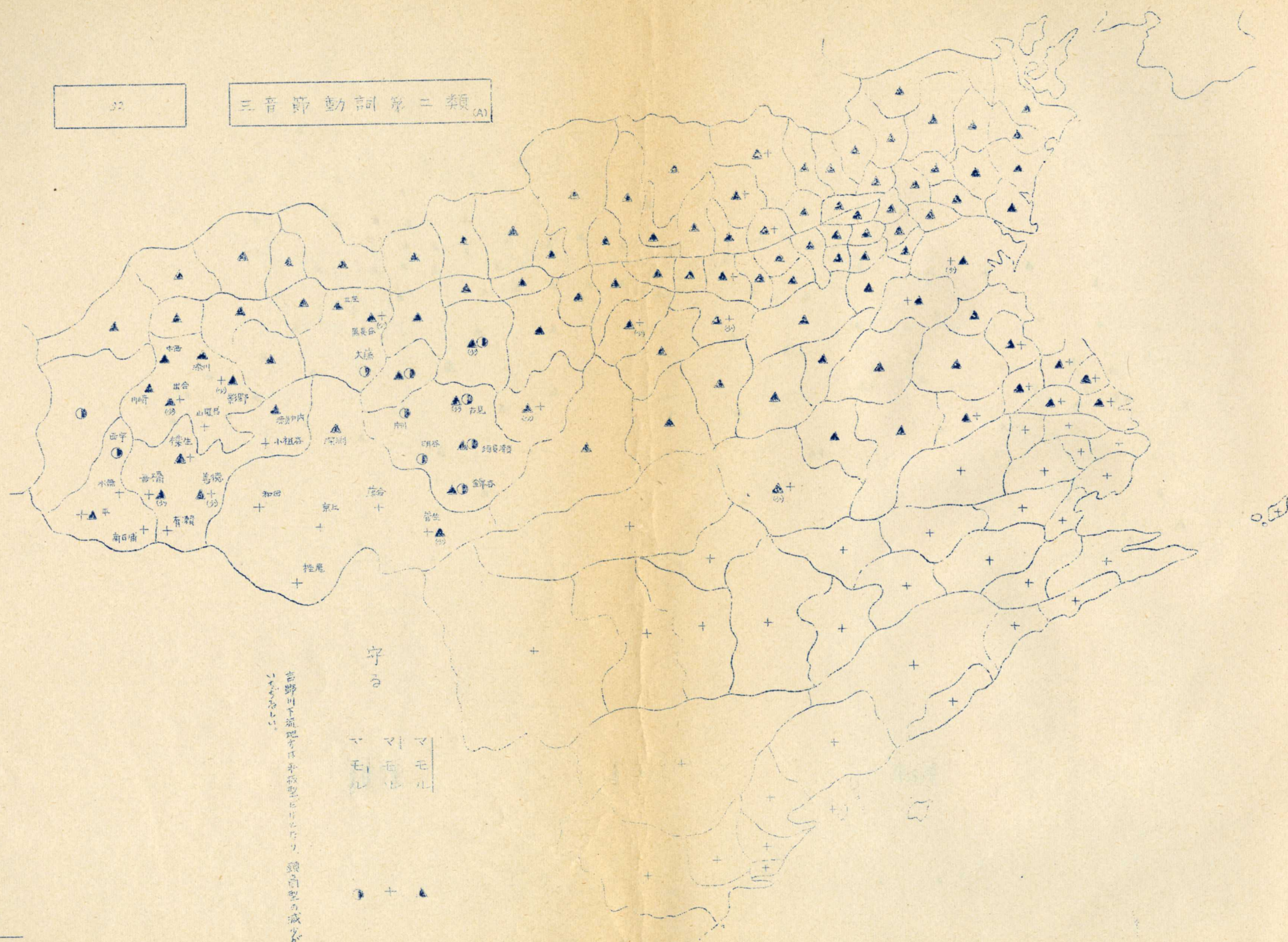


新

イノル
イノル
イノル

① + ▲

平仮名は西部地方では大に普及がみられ、カタカナは、東部地方で、さらに普及している。
又、中間型の分布は前記と大差がない。

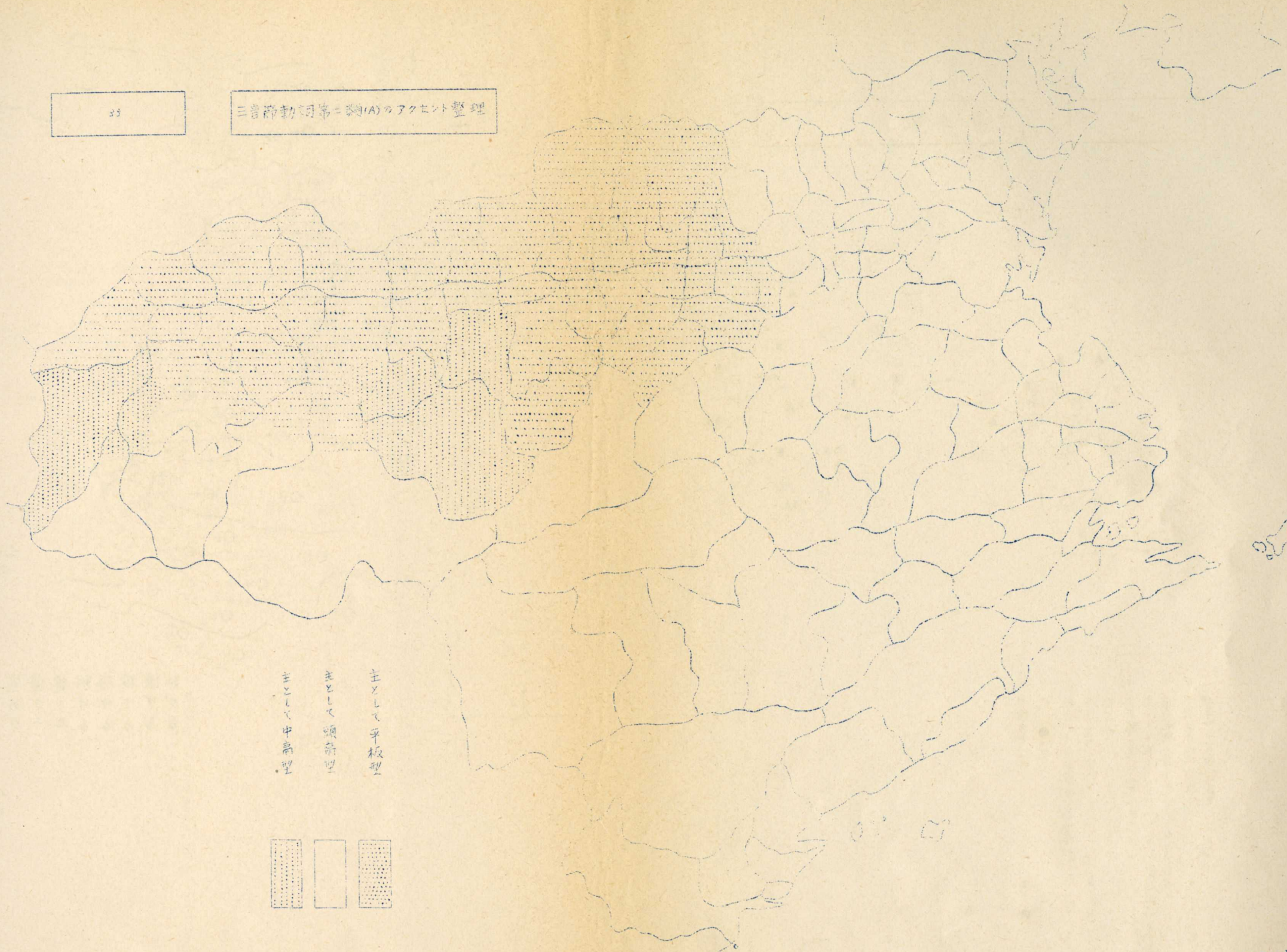


守る

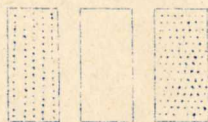
マ	マ	マ
モ	モ	モ
ル	ル	ル

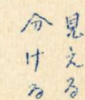
吉野川下流地帯は赤坂型とリル型と、銀白型の減少が
いそがしい。

● + ●



主として平板型
主として頭高型
主として中高型



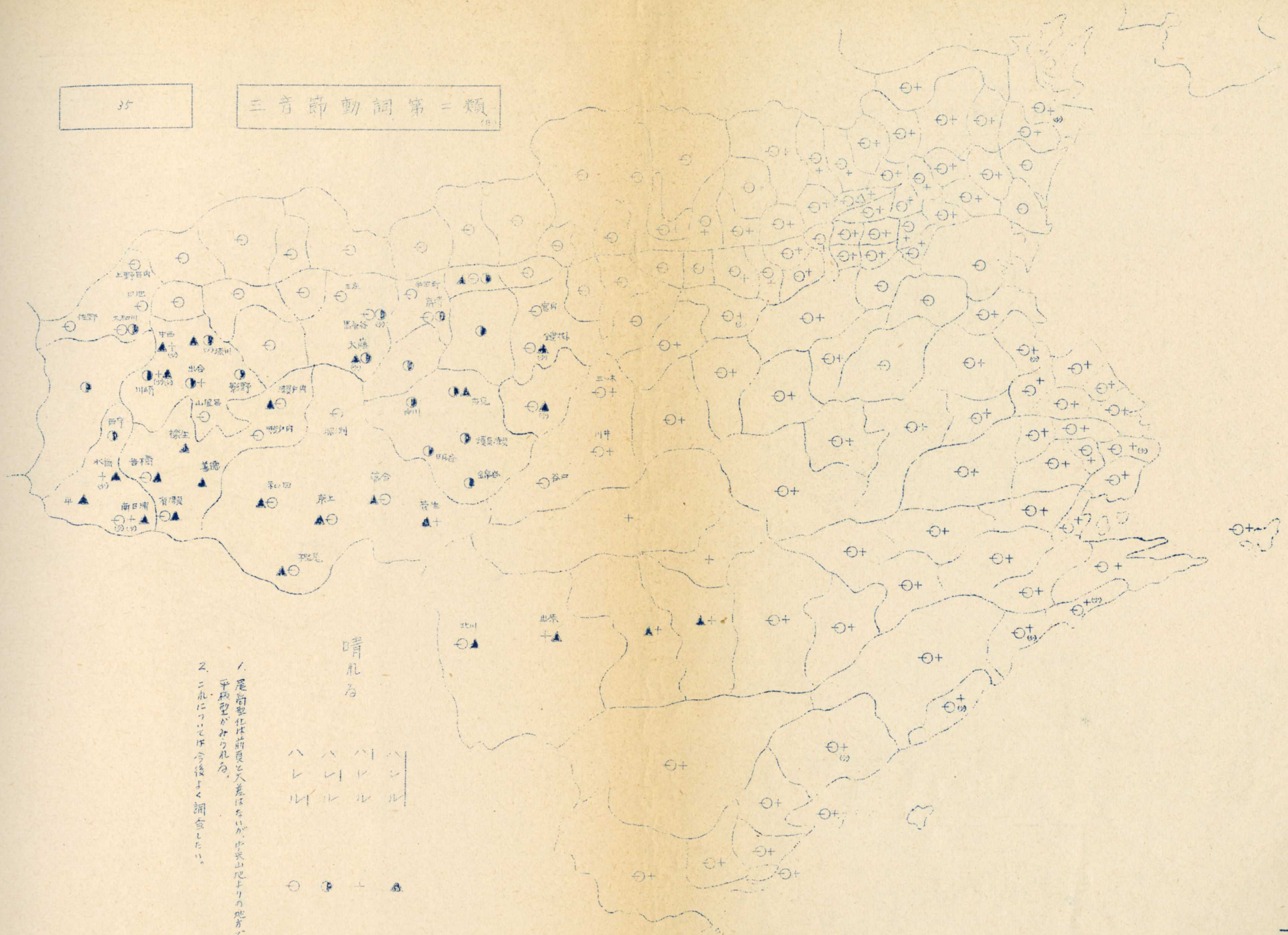


生きろ

子 子 子 子
子 子 子 子
子 子 子 子

△ ⊖ ⊕ +

本類の京管アフレントの變遷は ○●●●●●
 ○●●である。
 2. 本縣では尾高型化が吉野川二流よりの地方で進んで
 あり、また、塩門市、徳島市、阿南市（香川）その他の
 郡市部でも変化がいちぢましい。
 3. 頭高型、尾高型の流行地方では、そのいずれをも用いる
 者が、大多數としてゐるが、平高層に頭高型が多く
 若い世代に尾高型の多くなる傾向もみられた。
 4. 中瀬型の形成過程はよくわかってゐないが、二流を用いる
 地方は三音節語を中瀬型にする傾向に一致してゐる。

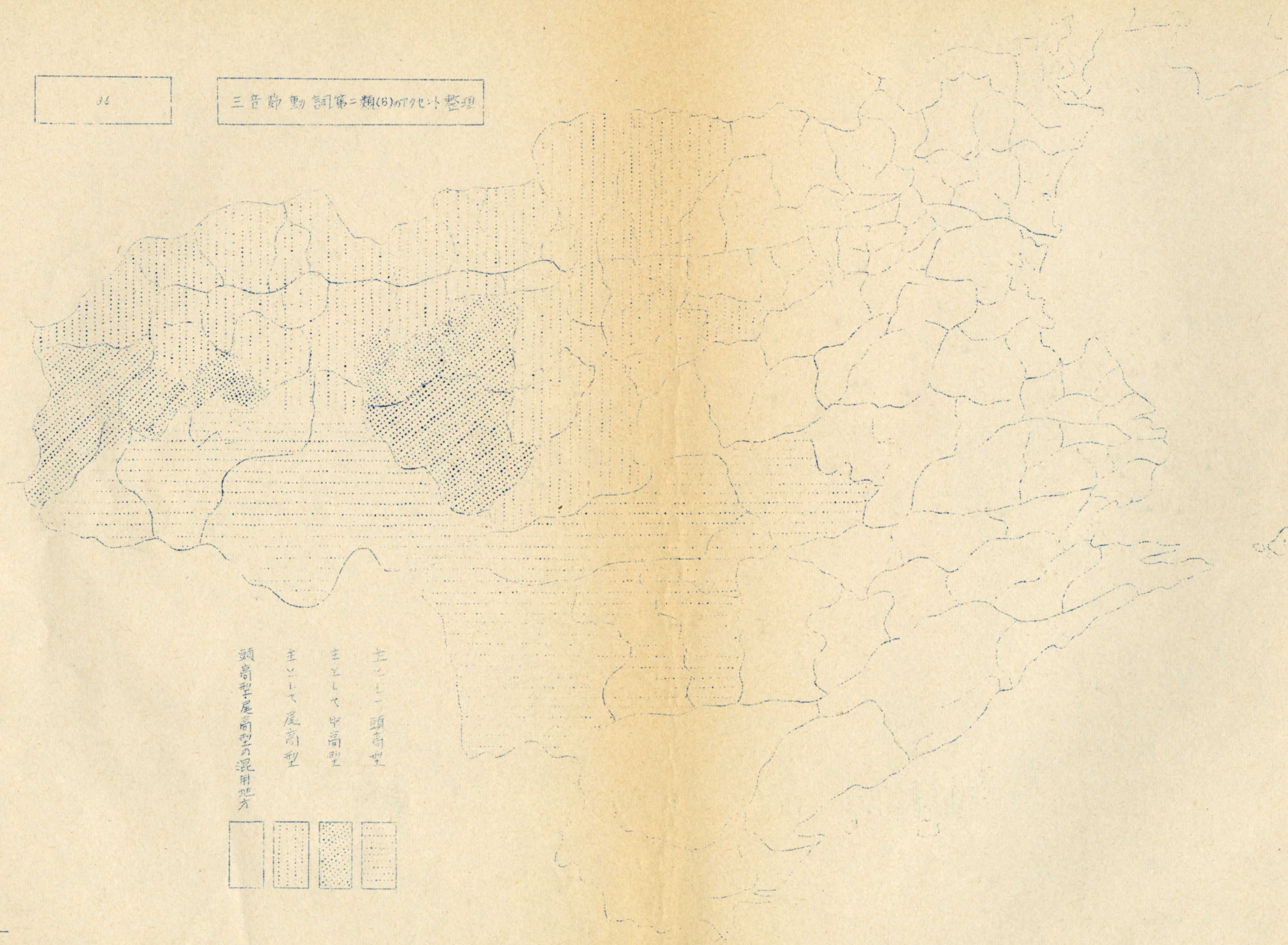


晴れる

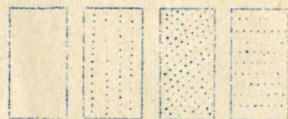
ハ	ハ	ハ	ハ
レ	レ	レ	レ
ル	ル	ル	ル

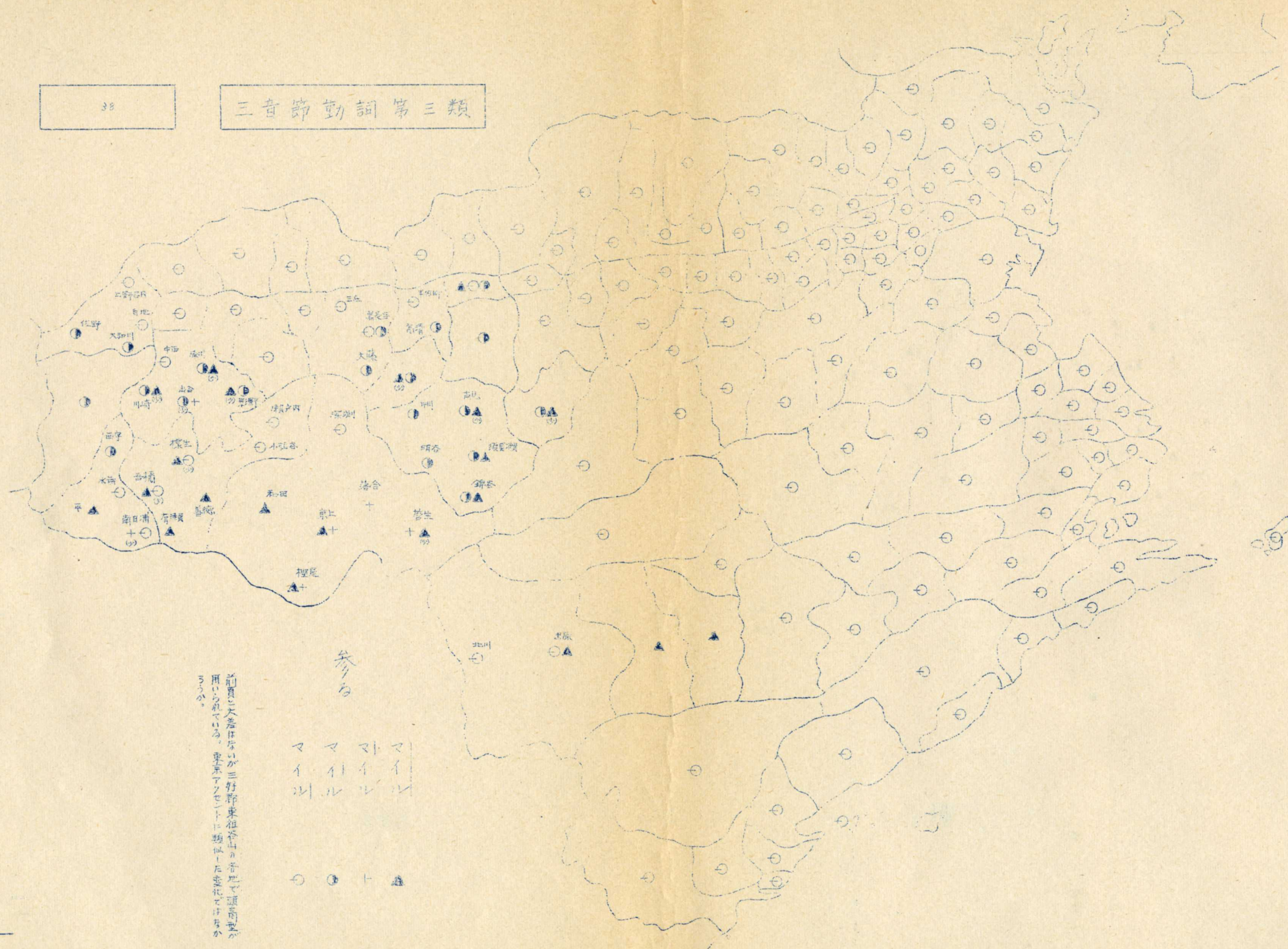
○ ● + ▲

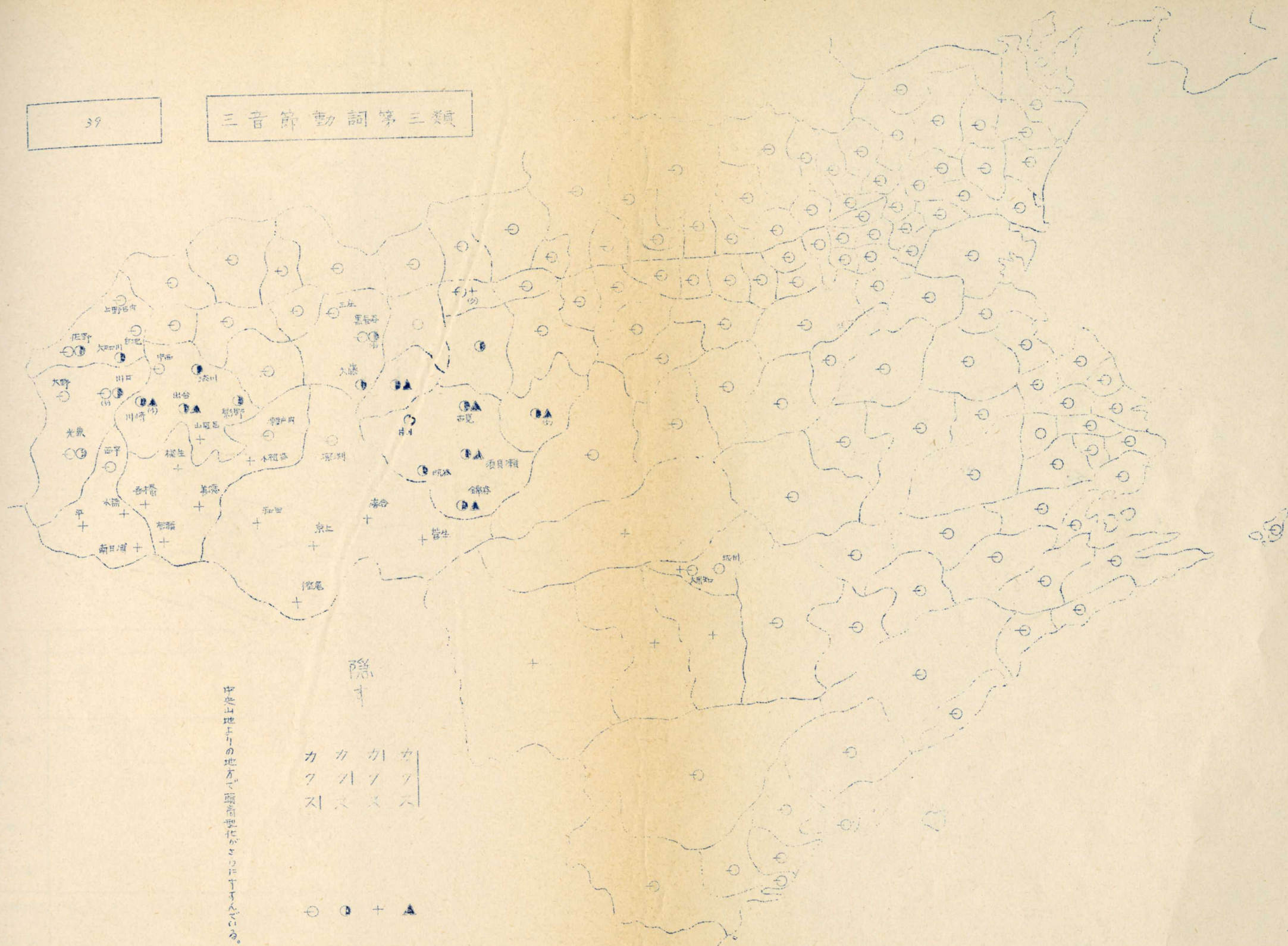
1. 尾節型は前段と入差はないが中央山地よりの地方で平調型がみられる。
2. ニルについで今後よく調査したい。

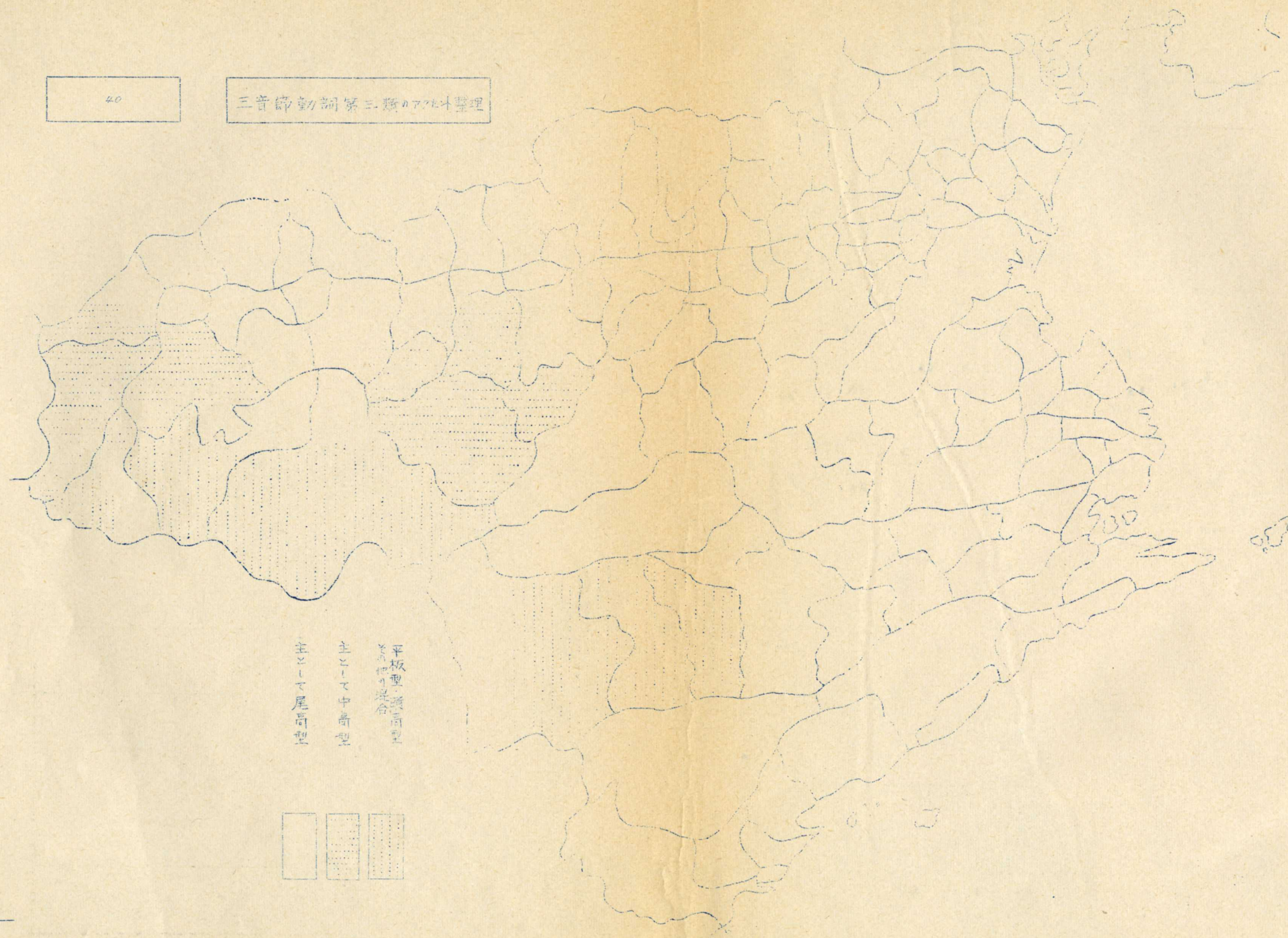


主として頭高型
主として中高型
主として尾高型
頭高型と尾高型の混用地方









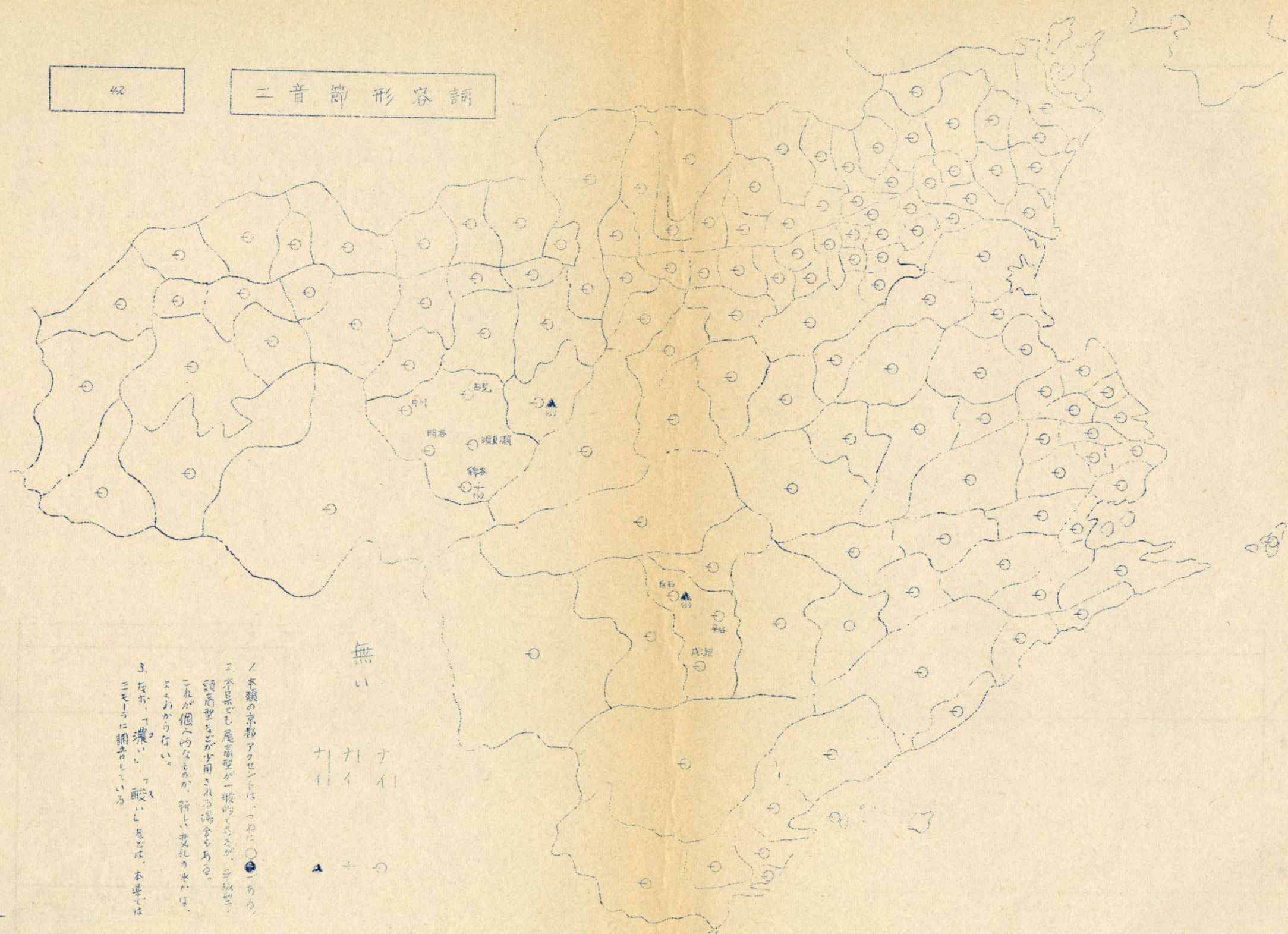


同一地帯でも個人により多少の差があり、また同一語彙でも語彙により文化があるが、大体的傾向をまとめる。下米のようになる。

2. これらの相互関係は今後考察してゆきたい。

代表地点 語類	1 徳島市	2 三 名	3 菅 生	4 古 宮 馬 地	5 影 野	6 池 田	7 平 京 谷 上
●●●	1(A)(B)	1(A)(B)	3	1(A)(B) 2(A)	2(A)	1(A)(B) 2(A)	1(A)(B) 3
●○○	2(A)	2(A)(B)	2(A)(B)		1(A)(B)		2(A)(B)
○●○				3	2(B) 3		
○○●	2(B) 3	3	1(A)(B)	2(B)		2(B) 3	
語類統合形式	1(A), 2(A), 2(B) (B) 3	1(A), 2(A), 2(B) (B) 3	1(A), 2(A), 2(B) (B) 3	1(A), 2(B), 3	1(A), 2(A), 2(B) (B) 3	1(A), 2(B), 3	1(A), 2(A), 2(B) (B) 3
統合数	3	3	3	3	3	2	2

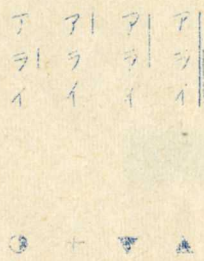
8 北小 川 祖 谷	9 出 合	10 端 八 山 千 代	11 一 山 城 谷 宇
2(A)(B)	1(A)(B) 2(A)	1(A)(B)	
	2(B) 3	2(A)(B) 3	1(A)(B) 2(A)(B) 3
1(A)(B) 3			
1(A) (B), 2(A) (B) 3	1(A) (B), 2(B) (B) 3	1(A), 2(A)(B) (B) 3	1(A)(B) (B), 2(A)(B) (B) 3
2	2	2	1



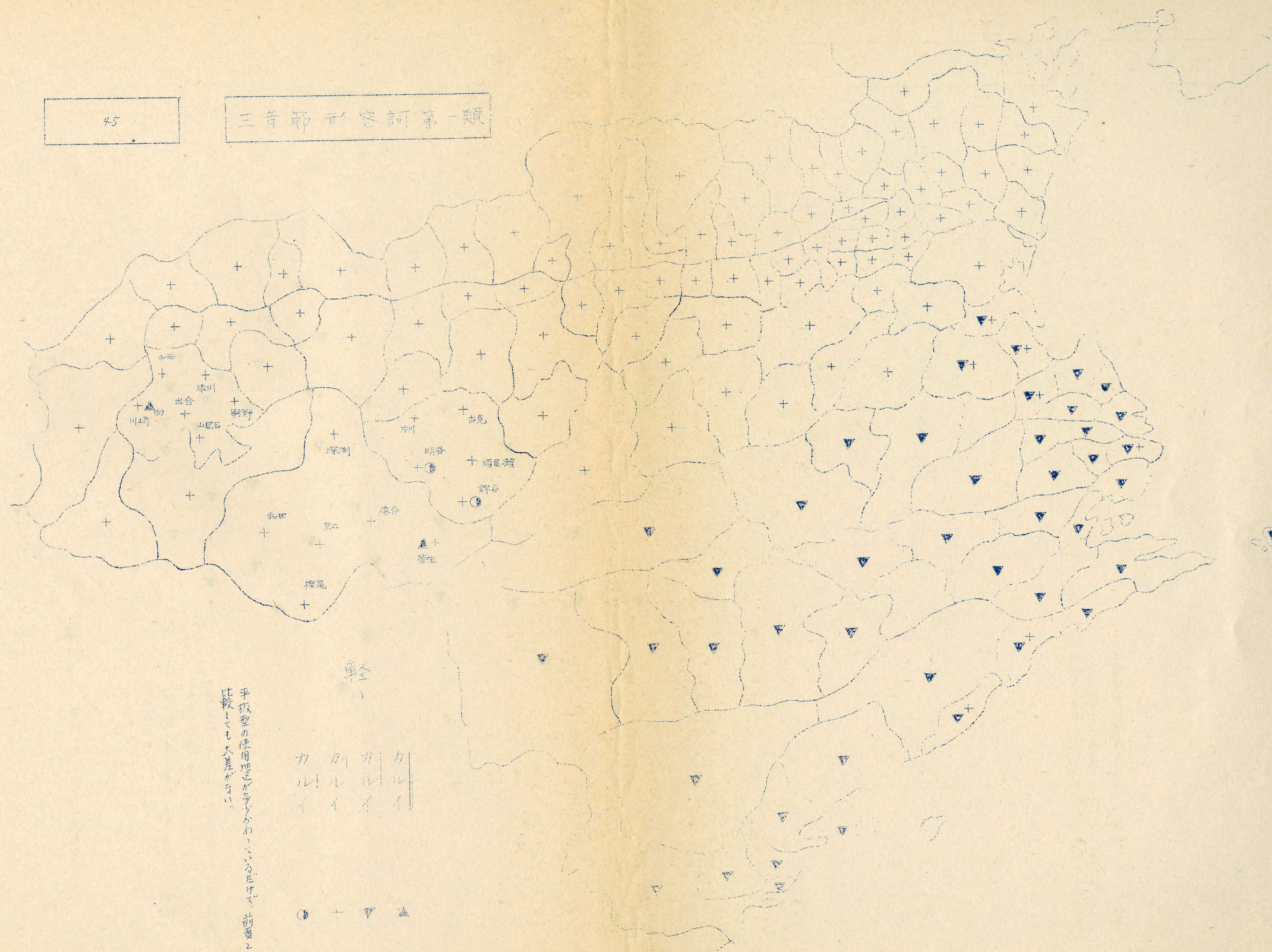
無い

ナ
イナ
イ

ノ本類の京都アクセントは、つねに○●ある。
 三、不規則な尾音型が一般的であるが、平仮名三
 頭音型も多少用いられる場合もある。
 これが個人的なもので、新しき変れ方水は、
 ようなものでない。
 3. なお、「濃い」「酸い」などは、本果では
 ニモ一に調音している。



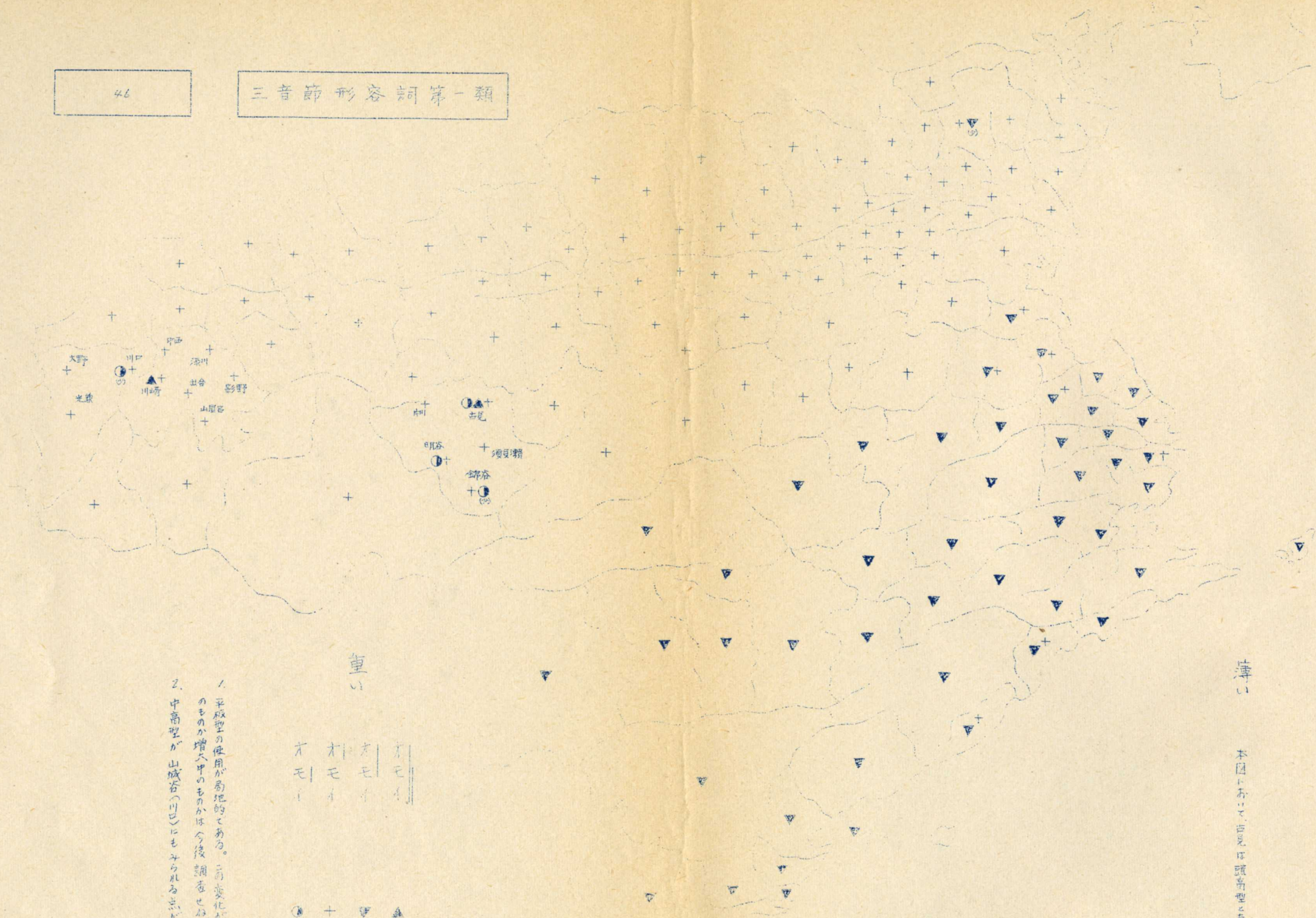
— 44



平仮名の使用地が多々分かれているだけで、印刷上と
比較しても大差がない。

カル
ル
イ

① + 7 山



重い

オモイ	オモイ	オモイ	オモイ
オモイ	オモイ	オモイ	オモイ

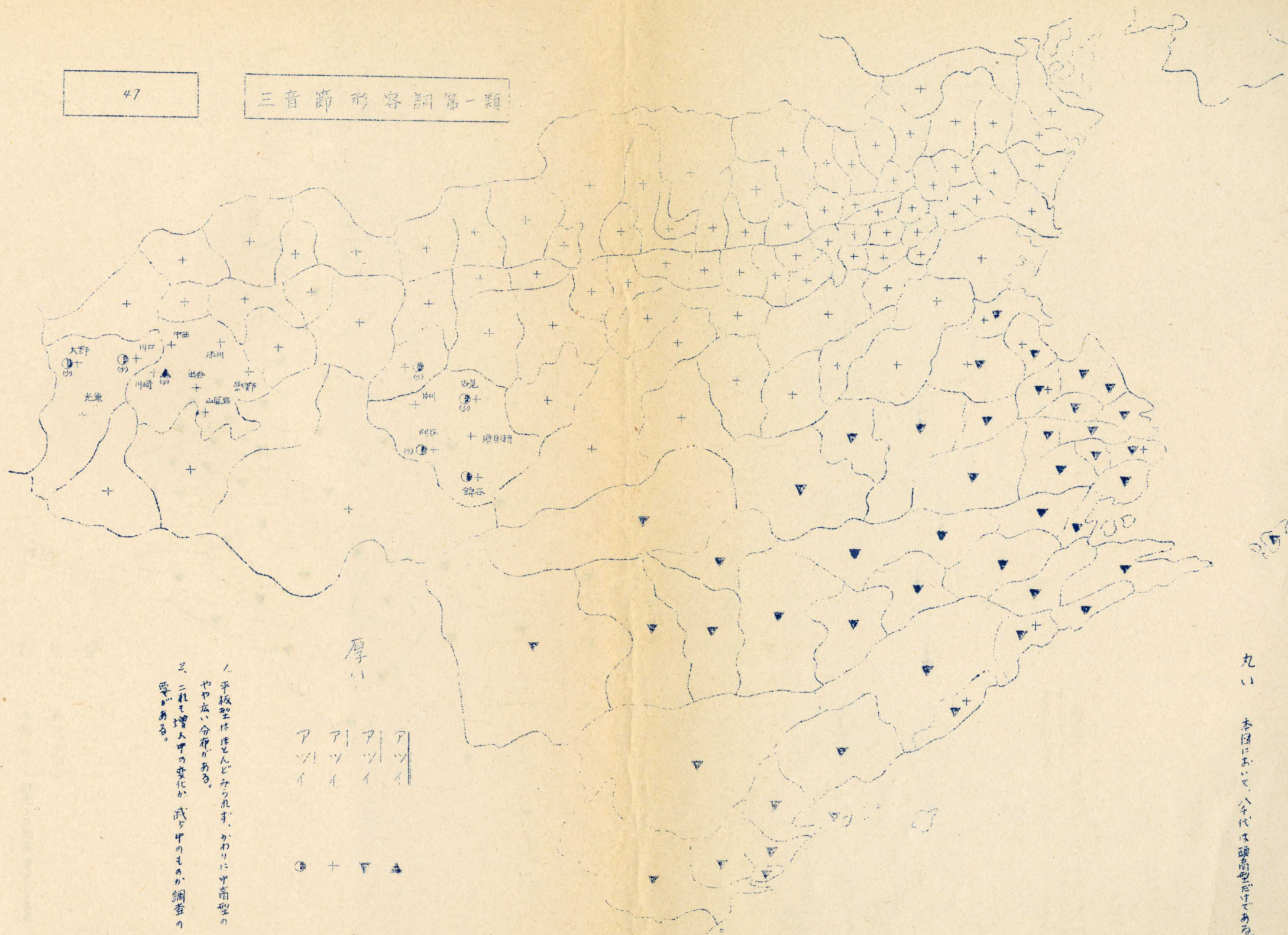
● + ▼ ▲

1. 平仮名の使用が局地的である。二音変化が減少過程のものが増え、甲のものか、今後調査せねばならない。

2. 中高型が山城谷(川口)にもみられる点が注目される。

薄い

本図において、古えは讀高型となる。



丸い
本國において、八十年代は頭型だけである。

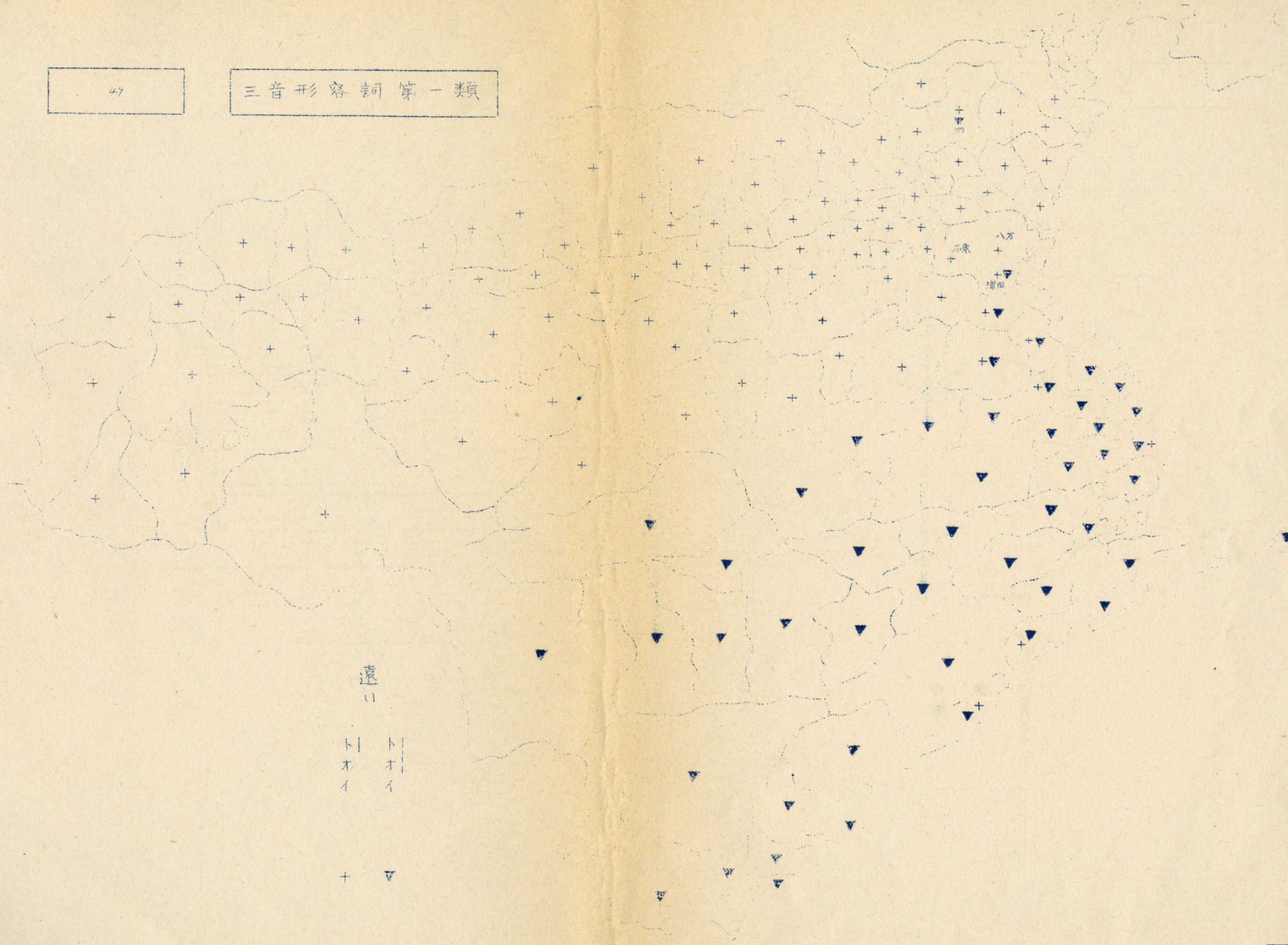
本國に於いて、板東とは頭高坐だけである。
浅いと同じ。

赤い

ア	ア	ア
カ	カ	カ
イ	イ	イ

+

東北の頭高型と、東南の頭二高型の分布がはっきりと分ちあれる。そして、東南部で頭高型への文化が濃りにかけてゐることに、つて、すでに述べたとおりである。

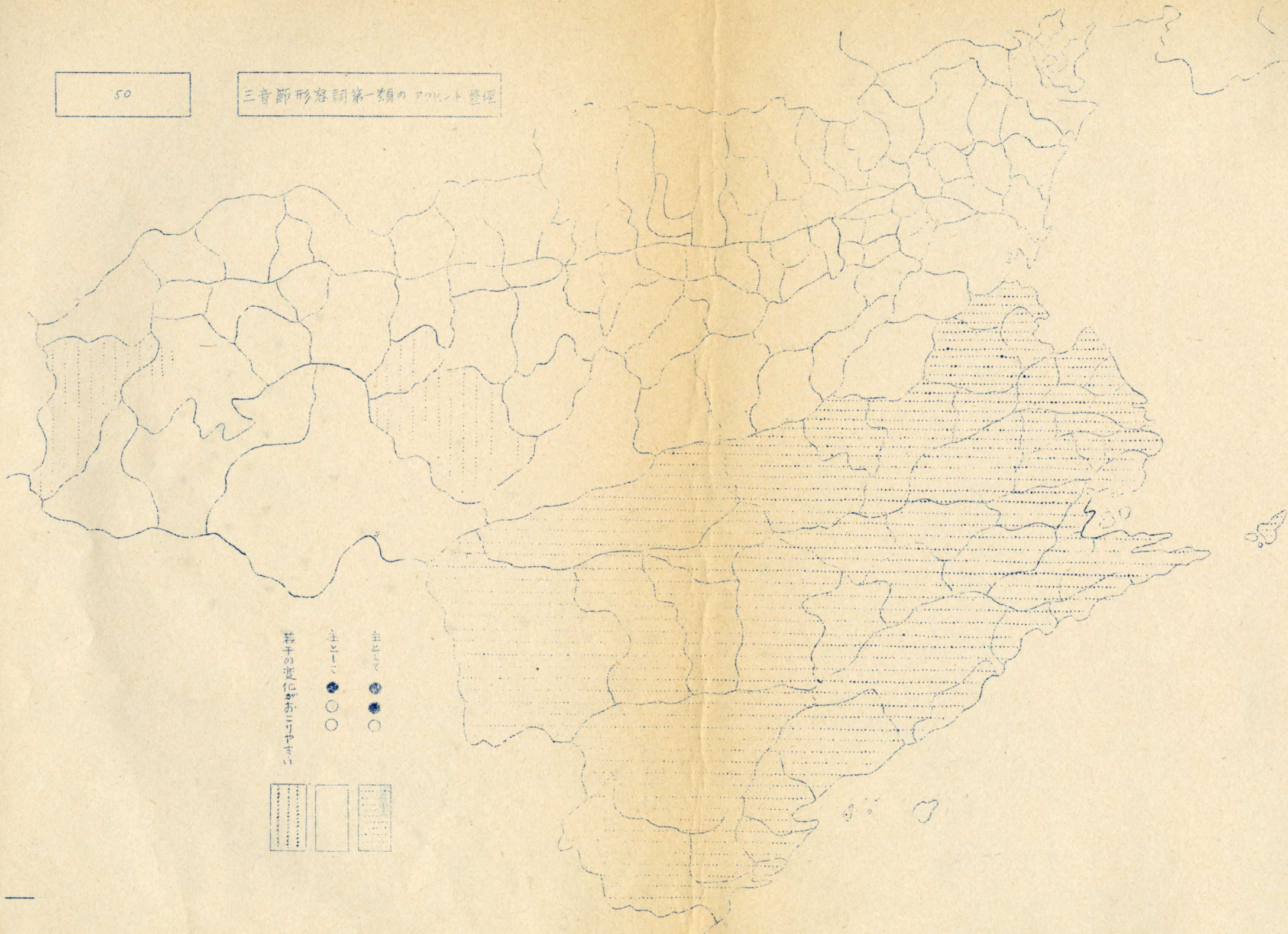


遠
い

ト	ト
オ	オ
イ	イ

+

▽

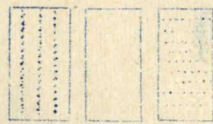


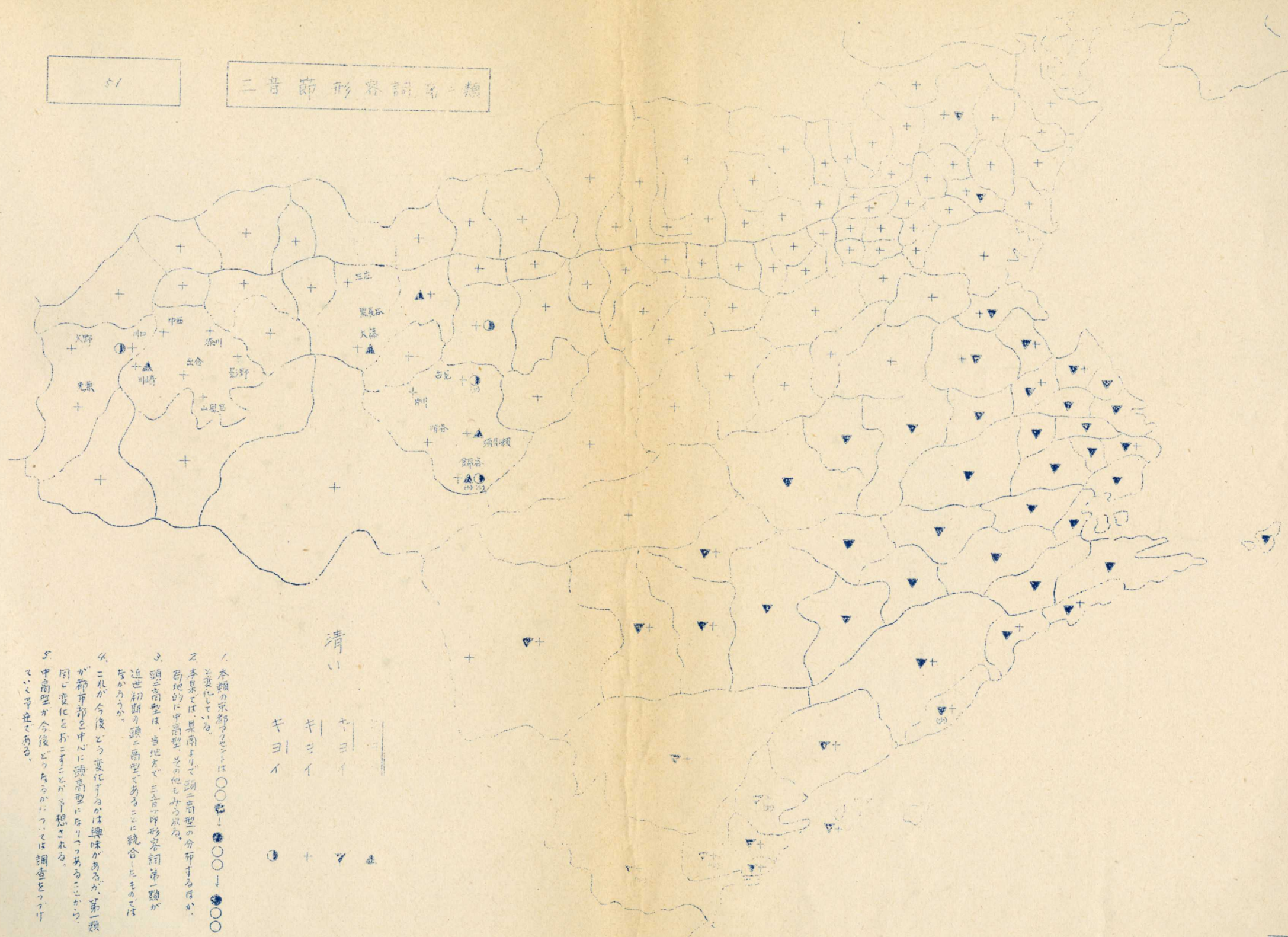
若干の变化が
ありやすい

主として



主として





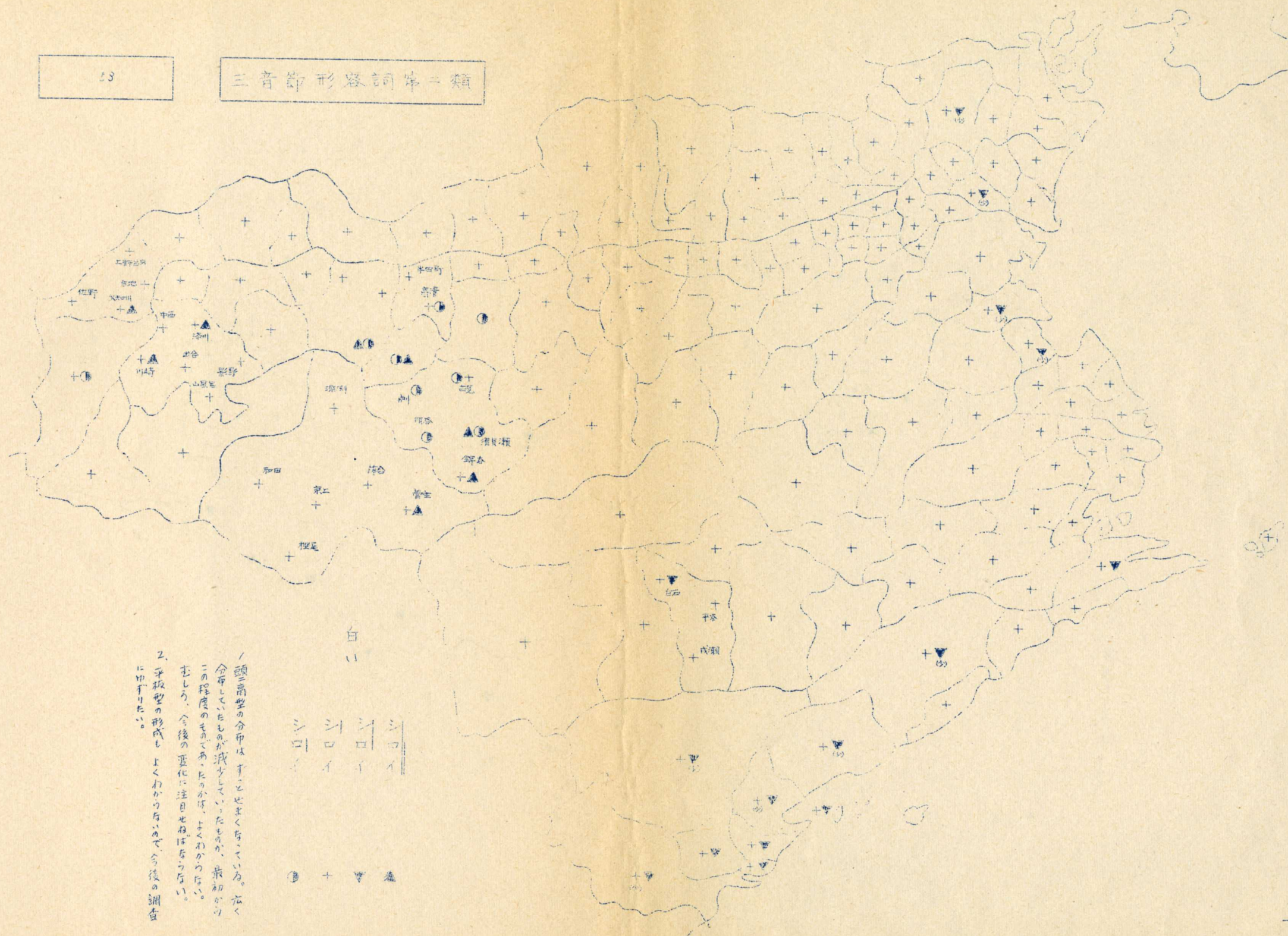
清い

キヨイ
ギヨイ
ギヨイ

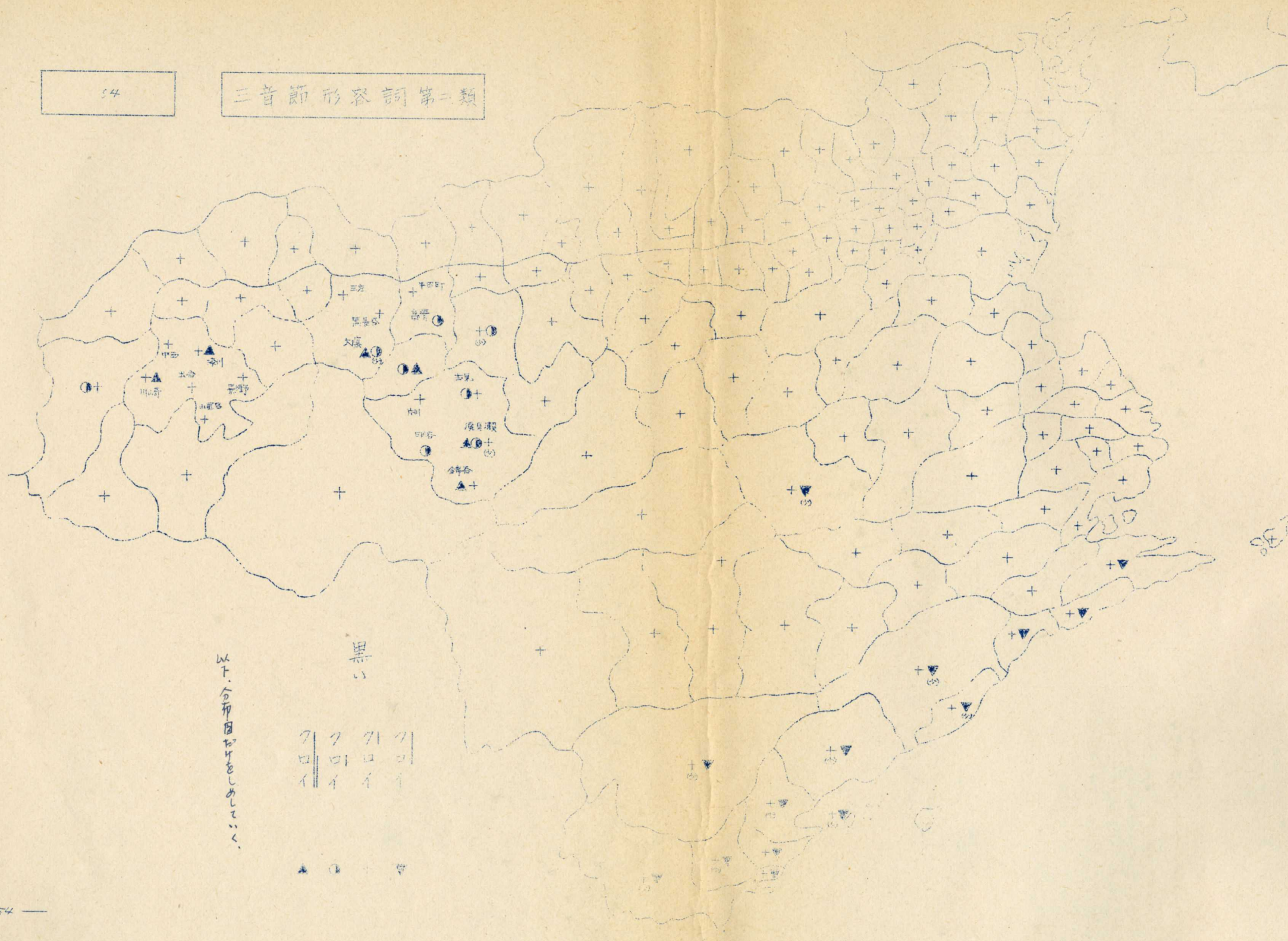
● + ▼ ▲

1. 本類の京都府内は○○●●○○○と変化している。
 2. 本邦では、東部より、頭二音節の分布するほか、
 局地的に中音型、その他もみられる。
 3. 頭三音型は、当地方で三音二音形容詞第一類が
 近世初期の頭二音型であることに適合したものであ
 るからである。
 4. これが今後どう変化するかは興味があるが、第一類
 が都市部を中心に頭三音型になりつつあることから、
 同じ変化を予見することが考えられる。
 5. 中音型が今後どうなるかについては調査を待つ
 べく予見である。

④ + 7 4



三音節形容詞第二類

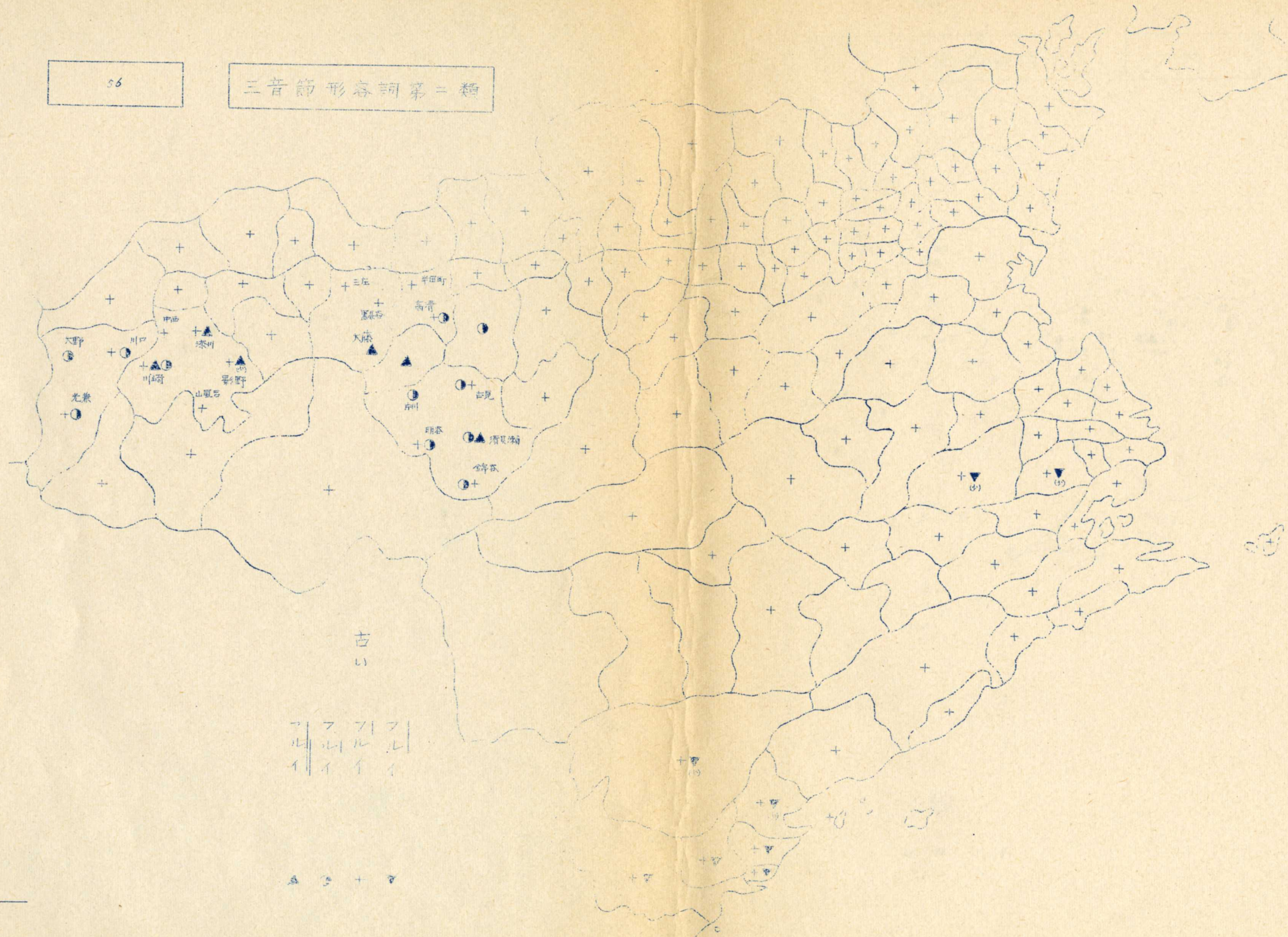


黒い

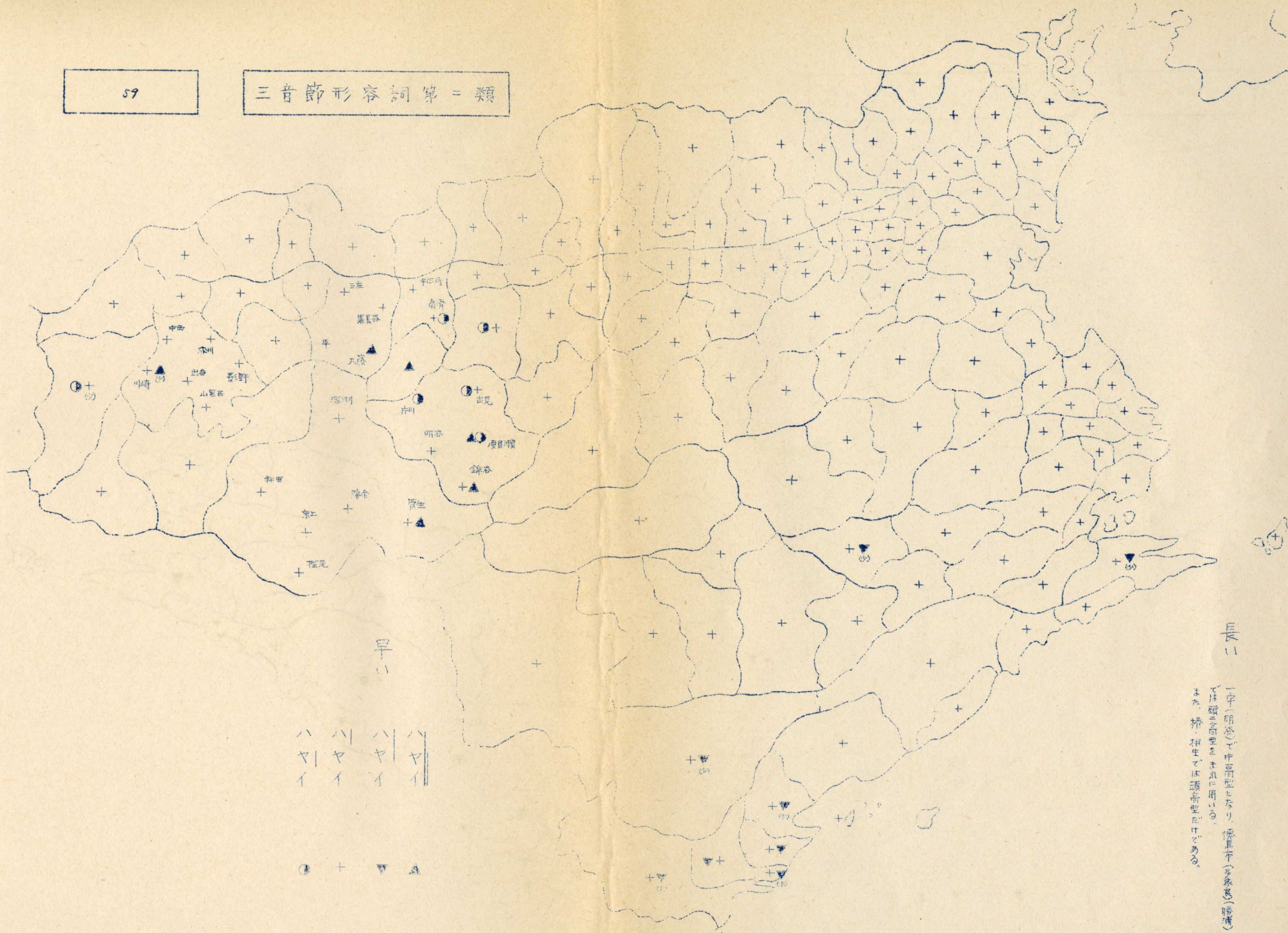
ク	ク	ク	ク
ロ	ロ	ロ	ロ
イ	イ	イ	イ

▲ ● ▼

以下、各都府県をわけていく。



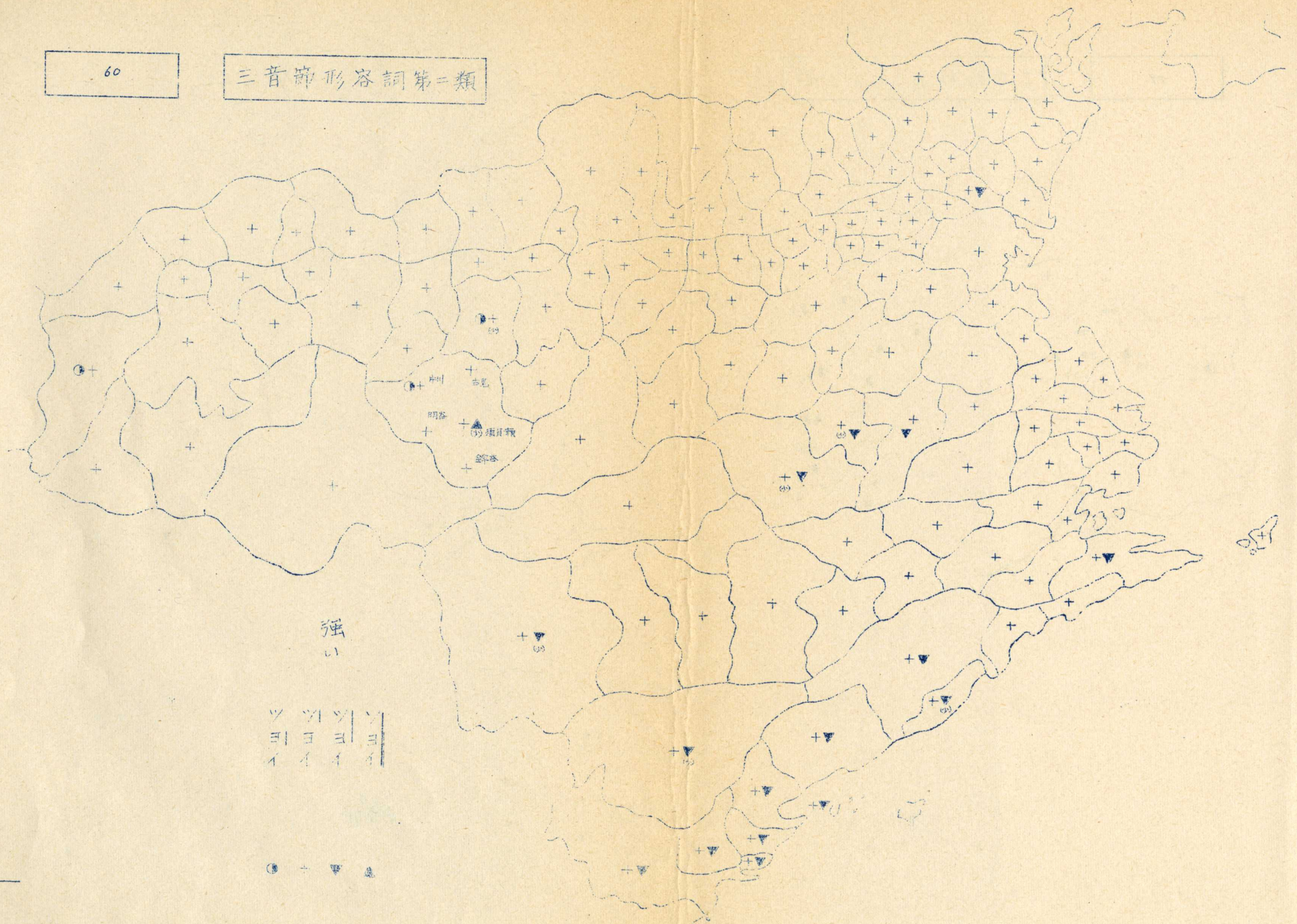
三音節形容詞第二類



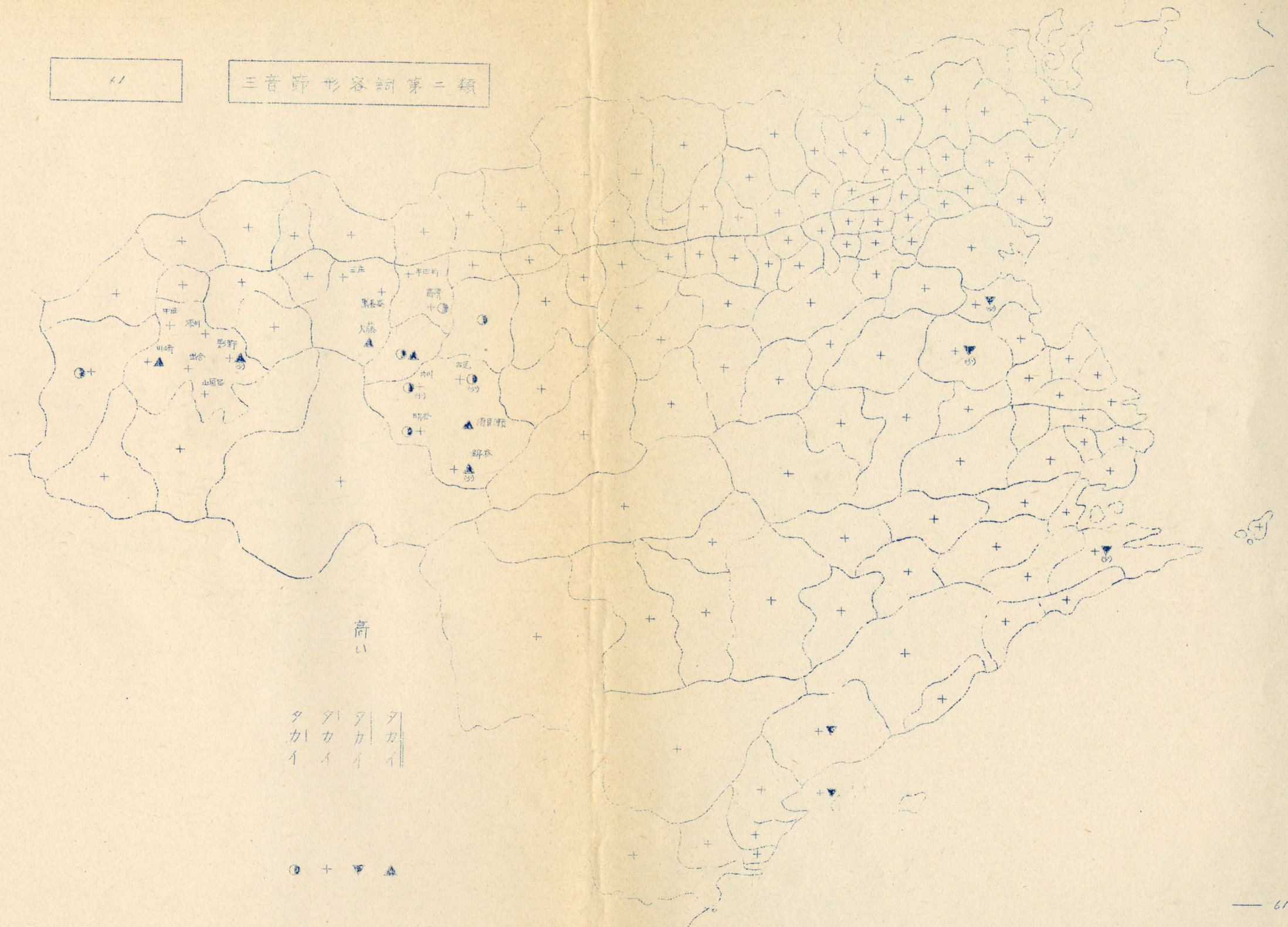
ハヤ | ハヤ | ハヤ | ハヤ |
 イ | イ | イ | イ |

● + ▼ ▲

長い
 一字一節で中二音型となり、標準型(多量型)勝過
 では頭三音型を主に用いる。
 また、標準型では頭三音型を主に用いる。



三音節形容詞第二類

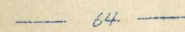


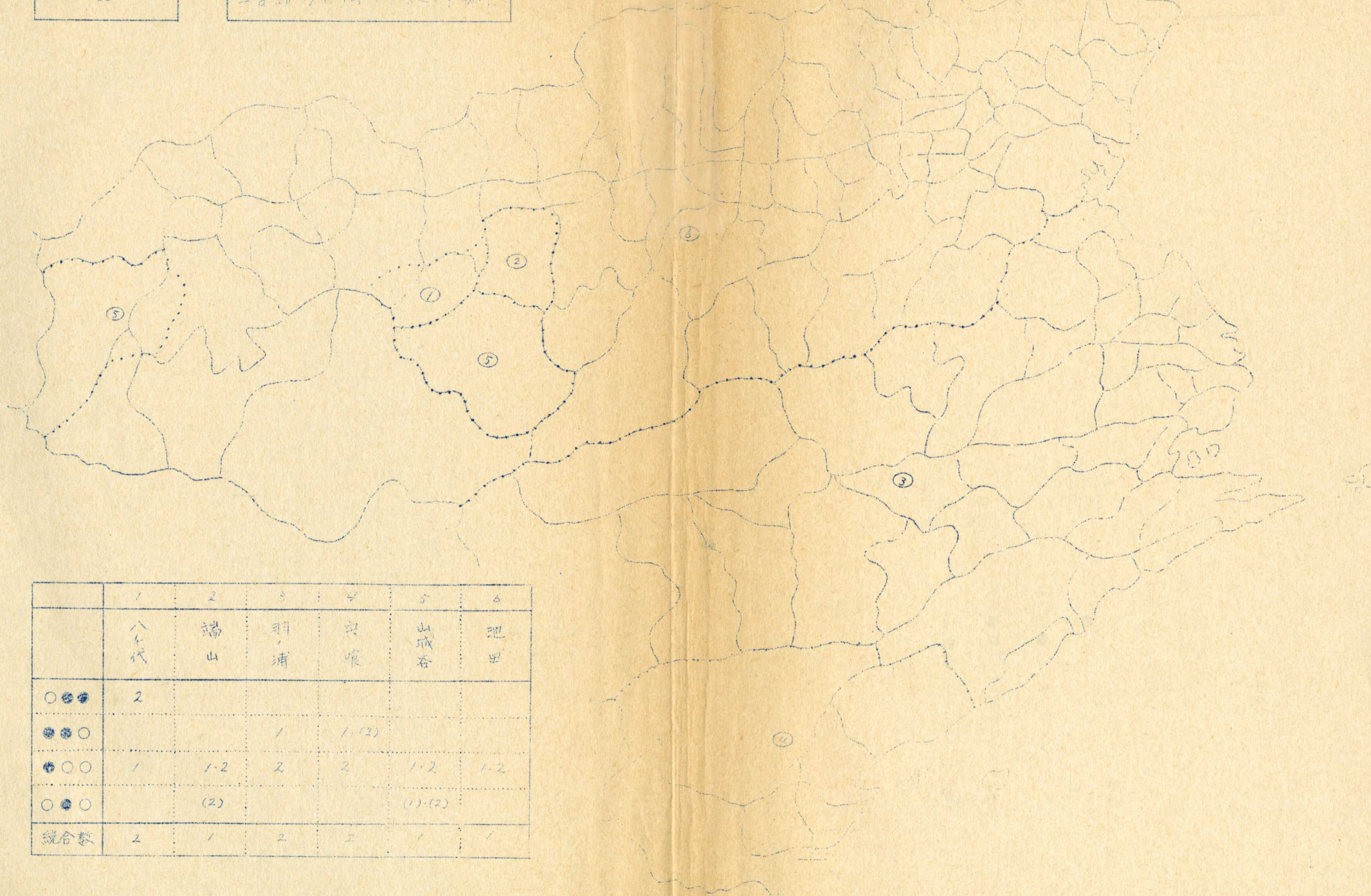
タ	タ	タ	タ
カ	カ	カ	カ
イ	イ	イ	イ

● + ▲ ■

三音節形容詞第三類

三音節形容詞第二類



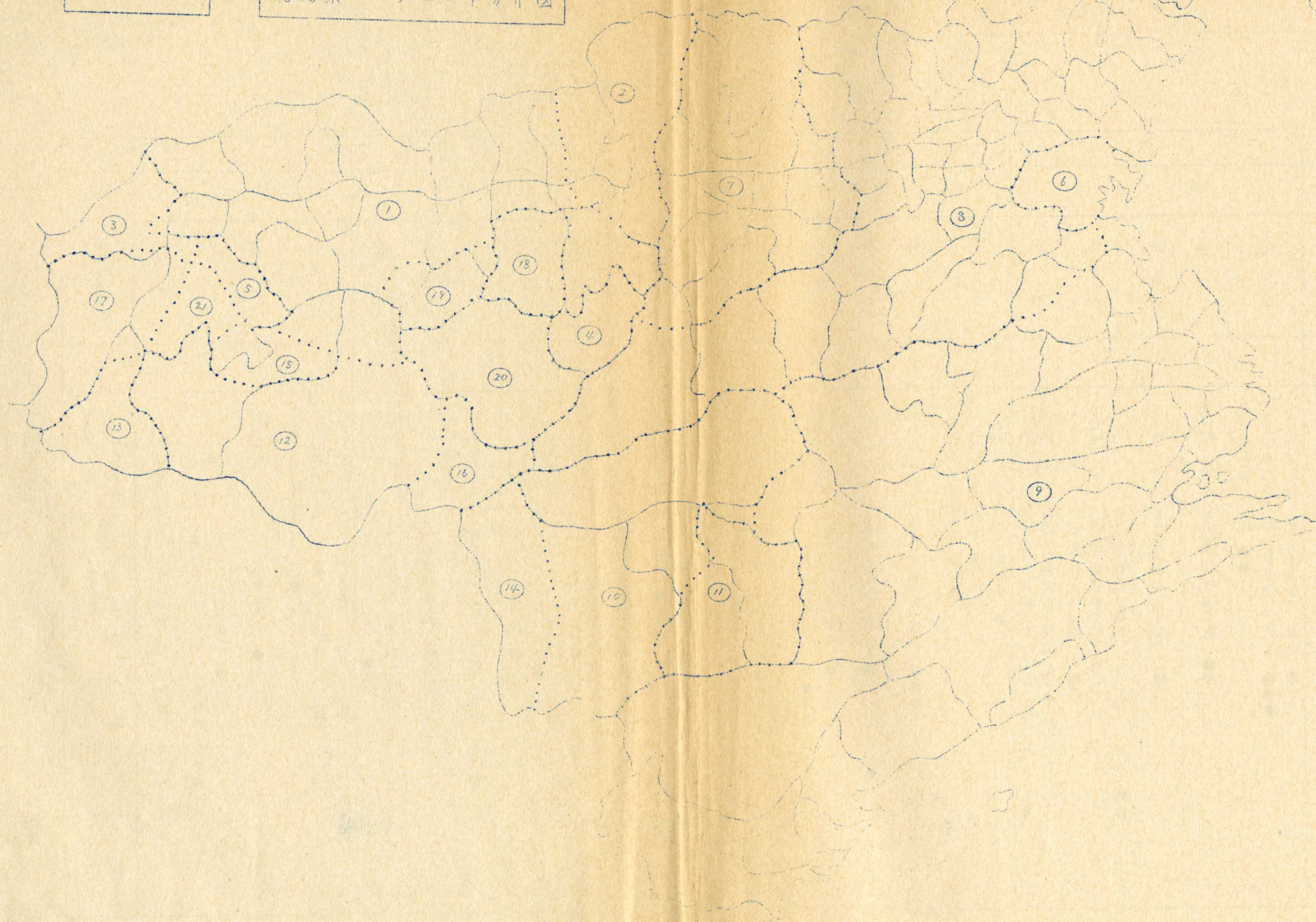


	1	2	3	4	5	6
	八代	端山	羽浦	実喉	山城谷	池田
○●●	2					
●●○			1	1・(2)		
●○○	1	1・2	2	2	1・2	1・2
○●○		(2)			(1)・(2)	
総合数	2	1	2	2	1	1

		1					2					3					4			5					6
式		池田					徳島市					出原					北川			山城谷					出合
型		池田					徳島市					出原					北川			山城谷					三繩(出合)
分布		1					2					3					4			5					6
おもな特徴		池田型において二音節動詞第三類 ●●● 二音節名詞第一類 第三類 統合 ●●● 一音節名詞第一類 第二類 統合 ●●▼					池田型において三音節動詞第三類 ○●○ 池田型において二音節動詞第三類 ●●○ 二音節動詞第一類 第二類 統合 ●●●					池田型において三音節動詞第二類 (B) 第三類 統合 ○●○ 三音節動詞第一類 (A) (B) ●●○ 三音節動詞第三類 ○●○ 三音節動詞第二類 (A) ●●○ 二音節名詞第二類 (A) ●●○ 二音節名詞第二類 第三類 統合 ○●▼ 徳島市型において三音節動詞第二類 (A) ●●● 徳島市型において三音節動詞第二類 (B) ●●○ 三音節動詞第一類 ●●● 三音節動詞第二類 (B) ●●○ 三音節動詞第二類 (B) ●													

1. 名詞のアクセントを考へあわせながら、徳島県のアクセントを概観すると、
本表のようになる。

2. これらの相互関係については、ありためて検討する予定である。



4N-087 (N3)
Mo.45
徳島

徳島市
木
重
幸
氏

国立国語研究所
OCT - 1964
~~K. 4607~~

